



札幌学院大学 2019 年度学生発案プロジェクト

「沖縄を

『戦争』と『基地問題』

から考えるプロジェクト」

報告集

はじめに

学生発案プロジェクトとは

札幌学院大学が主催している、大学生活でやってみたいこと、日頃考えているアイデアや、熱い想いに、最高 50 万円支援するプロジェクト支援事業です。この支援を受け、1 年間活動することができました。



(URL)

<https://www.sgu.ac.jp/campuslife/CollaborationCenter/j09tjo00000eb3dv.html>

プロジェクトのきっかけ

2019 年 4 月、教職課程を履修するある学生が、人文学部人間科学科教授の山本政俊先生から、「沖縄をテーマに何かプロジェクト企画を考えませんか？」とお声がけをいただきました。この学生が同じ教職課程を履修する友人に声をかけ、最終的に 5 名の学生が集まり、5 月に学内で行われる「学生発案プロジェクト審査会」に向けた準備が始まりました。この審査会を経て、6 月下旬に採用が正式決定し、本プロジェクトが本格的に始動しました。

内容と目的

沖縄は第二次世界大戦で、地上戦の場となりました。戦後は、アメリカの占領が 27 年間続き、日米安全保障条約によって今なお米軍基地が置かれています。日本国憲法の理念は平和と民主主義の国の建設でした。これに基づき、本学の理念も「人権」「共生」を考えるものとなっています。実際に自分の目で沖縄を見ることにより、現状を把握し、戦争に関する事象を深めること、本学の学生や教職員に学んだことを伝え、沖縄への関心、理解の向上を図ること、地域の中高生にも沖縄への関心を持ってもらうことを目的としています。これらの目的を達成するために、以下の活動を計画しました（学生発案プロジェクト審査会から）。

- ①「沖縄戦」「基地問題」に関する資料を読み、事前に知識理解を深める
- ②沖縄を訪れ、国内協定校である沖縄国際大学と交流する。交流により、現地の人の「戦争」や「基地問題」に対する考え・思い、いま現在の沖縄の現状を学ぶ。
- ③沖縄の戦争資料館を見学し、戦争に関する事象の理解を深める。
- ④プロジェクト活動の成果を学内で報告し、本学の学生や教職員の沖縄への関心、理解を深める。
- ⑤江別地域の中高で「沖縄」の授業をすることで、生徒に沖縄の現状や、戦争の影響を伝えることにより、沖縄への関心や理解を深めるとともに、高大交流を深める。

目次

はじめに	1
取り上げた戦争資料館・米軍基地・大学等の位置関係	3
第1章 戦争	4
1. 首里城	5
2. 旧海軍司令部壕	7
3. 嘉数高台	9
4. 佐喜真美術館	11
5. 対馬丸記念館	13
6. 平和祈念公園	15
7. ひめゆり平和祈念公園	17
8. 南風原文化センター	19
参考文献・資料等	21
第2章 基地問題	22
1. 基地問題の歴史	23
1-2. 日米地位協定とは	25
2. 日本における米軍基地	27
3. 沖縄における米軍基地の現状	28
3-2. 沖縄における米軍基地関連の事件・事故	29
3-3. 緑ヶ丘保育園	30
3-4. 沖縄の基地経済	34
3-5. 沖縄国際大学と普天間基地	36
3-6. 辺野古新基地建設問題	42
4. 北海道における米軍基地	45
5. まとめ	46
参考文献・資料等	47
第3章 学校での授業案	48
1. 「戦争」に焦点を当てた指導案	49
2. 「基地問題」に焦点を当てた指導案	54
第4章 個人のまとめ	58

取り上げた戦争資料館・米軍基地・大学等の位置関係



第 1 章 戦争

沖縄は、1944 年の「10・10 空襲」により大きな被害を受けると、1945 年 3 月に米軍が慶良間諸島に上陸しました。さらに 4 月 1 日には沖縄本島中部の西海岸に上陸し、この頃からの約 3 カ月にわたる戦いを「沖縄戦」と呼んでいます。激しい戦いの末、首里城地下にあった司令部を捨て、日本軍は本島南部へ退くが、そこは住民が避難していた場所でした。そこで約 1 か月戦いが続き、多くの民間人が犠牲となりました。この沖縄戦の重要な場所に関して、資料館を見学し、資料館の概要とそこから学んだことについてまとめています。

1. 首里城 (沖縄県那覇市首里金城町 1-2)

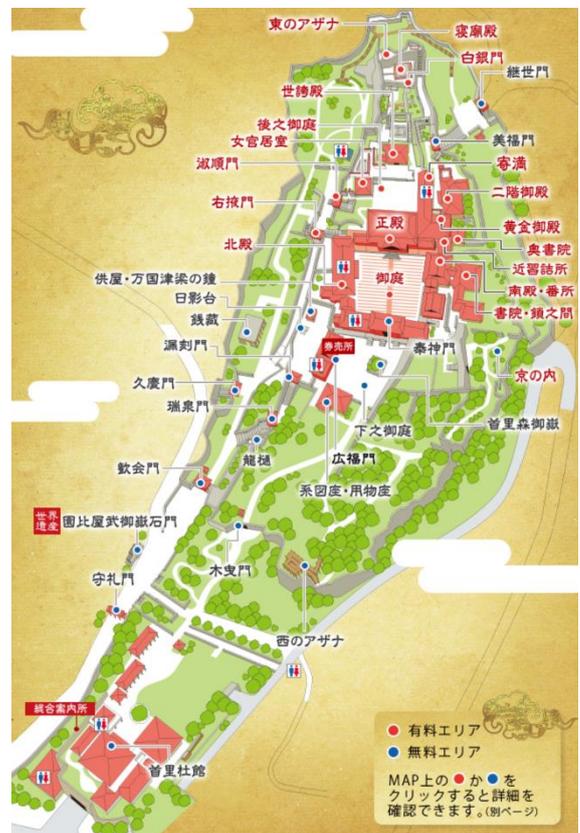
首里城は、1429年から1879年までの450年間にわたり存在した「琉球王国」の政治・外交・文化の中心として栄えた。1945年の沖縄戦で焼失したが、1992年に沖縄の本土復帰20周年を記念して国営公園として復元された。中国と日本の築城文化を融合した独特の建築様式や石組み技術には高い文化的・歴史的な価値があるとされ、2000年12月に世界遺産として登録された（『琉球王国のグスク及び関連遺産群』の一つ）。



首里城は、琉球王国の政治、外交、文化の中心地として栄えた。小高い丘の上に立地し、城壁で取り囲まれ、その中に多くの施設が建てられている。また、いくつもの広場を持ち、信仰上の聖地も存在する。これらは「グスク」と呼ばれる沖縄の城に共通する特徴である。他のグスクは首里城との争いに敗れ、滅んでしまった。首里城は15世紀初期に内郭、16世紀中期に外郭が完成した。1879年に「沖縄県」になった後、首里城は日本軍の駐屯地、各種の学校等に使用された。1945年の沖縄戦で焼失し、跡地は琉球大学のキャンパスとなった。琉球大学移転後に復元事業が進み、1992年に沖縄の本土復帰20周年を記念して国営公園として復元された。復元された首里城は、18世紀以降をモデルとしている。

首里城の特徴

- ① 中国や日本との長い交流の歴史があったため、建築・文化の影響を受けている（特に正殿、南殿、北殿）。
- ② 城内の各施設は東西の軸線に沿って配置されているため、西が正面になっている。
- ③ 王宮（国王とその家族が居住する）であると同時に、王国統治の行政機関「首里王府」の本部である。また、各地に配置された神女たちを通じて王国祭祀を運営する宗教上の拠点である。
- ④ 芸能・音楽が盛んに演じられ、美術・工芸の専門家が数多く活躍し、文化芸術の中心であった。



首里城焼失の歴史 「首里城の歴史」『沖縄タイムズ』、2019年11月1日、朝刊、24面

1429	尚巴志、三山を統一。「琉球王国」が成立
1453	「志魯くしろ・布里の乱」が起こり首里城全焼
1660	失火で首里城炎上、正殿などが全焼 *1672年に再建
1709	首里城焼失 *1712年に再建、1715年に完了
1879	首里城の明け渡し。琉球王国の崩壊。沖縄県の誕生
1925	首里城正殿が国宝に指定される
1933	歓会門、瑞泉門、白銀門、守礼門が国宝に指定される
1945	沖縄戦により首里城焼失
1958	守礼門復元
1974	歓会門の復元竣工
1984	久慶門の復元竣工
1989	首里城正殿、南殿・番所、北殿、奉神門等の復元に着手
1992	首里城公園の正殿など一部が開園
2019	首里城焼失（10月31日）



琉球王国とは 1429年に成立し、1879年まで日本の南西諸島に存在した王制の国である。北は奄美諸島から南は八重山列島までの琉球諸島には約3万2千年前から人類が住んでいたことが分かっている。この琉球諸島には12世紀ごろから政治的勢力が現れ始めた。各地に「按司くあじ」と呼ばれる豪族が現れ、互いに抗争と和解を繰り返してきた。やがて、1429年に尚巴志が初めて統一権力を確立した。これが尚家を頂点とする琉球王国が始まった。その後、琉球では中国をはじめ、日本、朝鮮、東南アジア諸国との外交や貿易を通して海洋王国へと発展した。

大きな政権交代が琉球王国では一度だけあった。1469年に伊是名島くいぜんじまの農夫出身の金丸がクーデターにより政権を奪取し、新王朝を開いた。金丸は前例に従うとともに、中国皇帝との関係にも配慮して尚王家を継承し、「尚円王」と名乗った。そのため、琉球王国の歴史では、この政権交代以前の王朝を「第一尚氏王統」、以降を「第二尚氏王朝」と呼んでいる。このうち、第二尚氏王統は尚泰時代まで約400年続いた。

1609年には薩摩藩が3000名の軍勢をもって琉球に侵攻し、首里城を占拠した。これ以降約270年間にわたり琉球王国は、表向きは中国の支配下にあったが、実際には薩摩と徳川幕府の従属国であるという国際関係の中で存続していた。しかし、明治維新によって成立した日本政府は、1879年に軍隊を派遣し、首里城から国王であった尚泰を追放し、沖縄県の設置を宣言したことで、琉球王国は滅亡した。

2. 旧海軍総司令部壕 (沖縄県豊見城市字豊見城 236 番地)

旧海軍司令部壕は 1944 年に日本海軍設営隊 (山根部隊) によって掘られた司令部壕で当時は約 450m あったといわれている。かまぼこ型に掘りぬいた横穴をコンクリートと杭木で固め、米軍の艦砲射撃に耐え、持久戦を続けるための地下陣地で、4000 人あまりの兵士が収容されていた。戦後しばらく放置されていたが、数回にわたる遺骨収集ののち、1970 年に観光開発事業団によって司令官室を中心に 300m が復元された。



写真：旧海軍司令部壕入口階段

旧海軍司令部壕が設営された理由は、沖縄戦において大日本帝国海軍の司令部として使用するためである。1944 年の太平洋戦争において、日本軍の敗色が濃厚となり戦線が南西諸島付近まで後退したため、最前線となった沖縄の軍備が強化されることになった。沖縄における重要な軍事拠点の一つであった小禄〈おろく〉飛行場 (後の那覇空港) を守るための防空壕を建設することになり、飛行場を南東から見下ろす標高 74m の火番森あるいは七四高地と呼ばれる丘が選定された。司令部壕は 1944 年 8 月 10 日に着工されたが、本格的な工事は 10 月 10 日の十・十空襲以降に始められ、12 月に完成した。海軍第 226 設営隊 (山根部隊) の約 3000 名が設営にあたり、ほとんどの工事はつるはしなどを用いた手作業で行われた。小禄地区周辺にはこの他にも多数の防空壕が建設され多くの住民が動員されたが、海軍司令部壕は最高軍事機密であったため民間人は近付くことも許されず工事は軍隊の手のみによって行われていた。



壕内は全長約 450m の坑道といくつかの部屋から成り立っており、司令官室など重要な部屋は砲撃に耐えられるようコンクリートや漆喰で補強されている。また、坑道の壁にはつるはしで削られた跡が残っている。(右の写真は実際に壕を掘る際に使用されたつるはしである。)



各部屋の説明

(1) 作戦室（写真 1）

7.5 m²の広さがあり、作戦を立てるために使われた。壁はかまぼこ型に掘られており、防護のために漆喰で塗り固められている。

(2) 幕僚室（写真 2）

10 m²の広さがあり、幕僚が手榴弾で最期を遂げた時の破片の跡が残っている。

(3) 下士官兵員室（右写真）

壕内に 2 か所、それぞれ 13 m²の広さがある。この場所で約 4000 人余りの兵士たちが立ったまま睡眠や休息を取ったといわれている。



(4) 司令官室（写真 3）

司令官室の壁には「大君の御はたのもとに死してこそ人と生まれし甲斐ぞありけり（天皇のために死んでこそ、人間として生まれてきた甲斐がある）」という大田司令官の辞世の句が残されている。



写真 1



写真 2

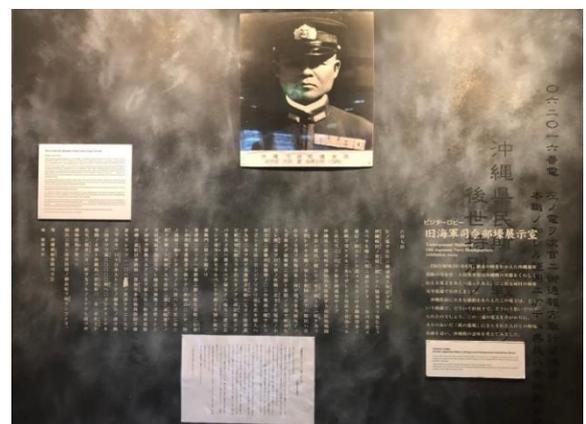


写真 3

司 令官であった大田實〈おおたみのる〉海軍少将はじめ幹部 6 名は、昭和 20 年 6 月 13 日夜半壕内で自決した。大田少将が海軍次官に宛てた、沖縄県民の献身的作戦協力について訴えた電報が残されている。

電報の現代語訳（一部抜粋）

「沖縄に敵の攻撃が始まって以来、陸海軍とも防衛のために戦闘にあけくれ、県民に関してはほとんどかえりみる余裕もありませんでした。しかし、私の知っている範囲では県民に関しては青年も壮年も全部を防衛のためにかりだされ、残った老人、子供、女性のみが相次ぐ砲爆撃で家や財産を焼かれ、わずかに体一つで軍の作戦の支障にならない場所の小さな防空壕に避難したり、砲爆撃の中でさまよったり、雨風にさらされる貧しい生活に甘んじてきました。」



大田實海軍少将と海軍次官に宛てた電報

3. 嘉数高台（沖縄県宜野湾市嘉数1丁目5）

宜野湾市嘉数にある「嘉数の高台公園」は、下はゲートボールができ、子どもが走り回れる位の大きな公園である。頂上のモニュメントに上がると、北谷〈ちやたん〉、読谷〈よみたん〉、普天間基地を望む事ができる、とても見晴らしの良い場所である。しかし、実際は戦争が行われた激戦地だった。沖縄に上陸した米軍に対して初めて日本軍が本格的に抵抗した場所で、両軍ともに多くの戦死者を出した。16日間に及んだ戦闘の末に、日本軍はこの地を明け渡すこととなった。



1945年4月1日に米軍が北谷、読谷、嘉手納〈かでな〉、に上陸。海には1500の艦船、18万の兵員、後方支援部隊を含めると54万人が動員された太平洋戦争最大規模の戦いだった。日本軍は、米軍の目を沖縄に向けさせ、本土決戦までの時間をかせぐため、壕に潜って戦う持久作戦を取った。言わば沖縄は「捨て石作戦」であったと言える。ここでは、右の写真のような「壕」があり、米軍が高地に北側から攻めてくることを予想し南向きに設計されている。中を覗くと暗く、高さもさほどなく、狭く、直線ではない曲がった構造になっている。ただ、壕を作るにも人手が必要で、兵士だけでなく女性や老人が、嘉数やその周辺地域から多くの住民が集められ作業にあたった。それに、この壕の地盤は「琉球石灰岩」で作られている。琉球石灰岩は、珊瑚や貝殻などが堆積してできた堆積岩で強度がある。沖縄では、古くから城壁、石垣、階段などにも使用されてきたため、掘るにも相当大変だったといえる。



トーチカ（右の写真）に隠れ、敵を向かい撃つ作戦をしていた。トーチカはロシア語で「点・拠点」を意味する軍事用語で、鉄筋コンクリートで作られている。中は大人3人ほど入れる所ではあるが、体の大きい人が入れればもちろん狭い。写真の様に、穴の空いている所からは、銃の先を出して敵が現れたら射撃するという方法を取っていた。逆を取れば、その穴から攻撃される場合もあった。実際に、このトーチカを見て見ると、銃弾の跡が無数にあることが確認できた。これらの作戦の他にも爆雷を抱えて体当たりをし、戦車を止める方法や、戦車の下に爆雷を持って隠れ爆発させ戦車を壊す戦法などを行う。この戦法により戦闘は16日間に及び、米軍が1日で22台の戦車を失うなど激しい戦いであったといえる。



嘉数高台の慰霊碑について

嘉数高台には3つの慰霊碑がある。1つ目は、右の写真の「青丘之塔」という、韓国人や朝鮮人を祀った慰霊碑。青丘は朝鮮（韓）半島のことを意味している。彼らは労働者として日本に連行されて働かされた。戦場では、最も弱い立場であり、最も危険にさらされている中で働く労働者だった。日本ではこのように、韓国人や朝鮮人の事について触れた碑は珍しいとされている。



2つ目は、右の写真の「京都の塔」という、民間人の被害に触れている慰霊碑。沖縄戦は兵士よりも民間人の戦死者が多かった。理由は、総動員で戦ったことと思うかもしれないが、実際には自決した人が多いことが挙げられる。米軍の捕虜になることは恥じであるため、捕虜になってはいけなかったとされていた。捕虜になりそうな時には自決するしかなかったのである。それに加え、沖縄の方言で話をするとスパイだと疑われ、日本兵に殺されてしまうこともあった。だからこそ、沖縄戦は民間人の被害が大きいといえる。慰霊碑が建てられているのは、京都の塔のみで、他の都道府県のは平和祈念公園に建てられている。京都が平和祈念公園ではなく、この地に建てた理由として、「この地で亡くなった人へのご冥福を祈り、戦争が繰り返されないように」ということが慰霊碑に書かれている。京都の兵士は2500名以上がこの地で戦死したことから、戦死者を讃えるのではなく、二度と戦争を起こしてはいけないという考えのもとで京都は嘉数に慰霊碑を建てている。



3つ目は、右の写真の「嘉数の塔」という、嘉数の住民が建てた慰霊碑。嘉数には日本軍が駐留していたこともあり、死亡率は集落の人口の過半数を超えるほど高かった。それは、上でも述べたが、住民の被害も多く含まれているからだ。慰霊碑には、嘉数区民の誠意と英勲を讃えていることが書かれている。



これらの慰霊碑には戦死者を讃えている文は書かれていない。区民の誠意、日本人だけでなく韓国、朝鮮人について語られ、戦争を繰り返してはいけないという平和を尊重する文言がある。このように、戦争の被害を繰り返してはいけないという反省を捉えられる重要な場所である。

4. 佐喜眞美術館 (宜野湾市上原 358)

佐喜眞(さきま)美術館は、米軍普天間基地の隣にあり、戦争や平和を考えさせられる美術館である。私たちがここを訪れたときには、「命どう宝 沖縄戦図」展覧会が行われていて、全14部展の作品が展示されていた。常設されている「沖縄戦の図」は、1984年に丸木位里さん(1901-1995)と丸木俊さん(1912-2000)が描いた。沖縄の地で体験者の証言を聞き、モデルになってもらい14部の連作を描き続けた。この「沖縄戦の図」を展示するために、この美術館が建てられた。屋上には6月23日の慰霊の日に、夕日が階段上部の四角に収まるような設計が施されている(右写真)。



美術館のあゆみ

1975年	佐喜眞道夫(館長)さんが、絵のコレクションを始める。 例) 上野誠、ケーテ・コルヴィッツ、ジョルジュ・ルオー、利根山光人など。
1983年	佐喜眞さんは、丸木位里さん、丸木俊さんが、「沖縄戦の図」に取り組んでいることを知って、心の底からの喜びを感じる。
1984年	丸木位里(いり)さん・丸木俊さんと出会い、「沖縄戦の図」を託される。
1992年	米軍普天間基地から1801㎡の土地を返還させる。
1994年	11月23日、佐喜眞美術館の開館。(設計 真喜志好一)
1995年	国連出版の『世界の平和博物館』に佐喜眞美術館が収録される。
2010年	中国・浙江美術館と北京魯迅博物館で、ケーテ・コルヴィッツ展を開催。
2011年	第33回琉球新報活動賞を受賞。
2014年	岩波ブックレット『アートで平和をつくる沖縄・佐喜眞美術館の軌跡』を出版。
2015年	韓国・北ソウル美術館で、ケーテ・コルヴィッツ展を開催。
2018年	第6回自由都市・堺 平和貢献賞受賞。

佐喜真美術館と沖縄戦について

今回の展示作品は、沖縄の図(八連作)(1983年) 久米島の虐殺(1)、久米島の虐殺(2)(右写真)、 亀甲墓、自然壕(ガマ)、喜屋武岬、集団自決、暁の実弾射撃、ひめゆりの塔。

沖縄戦の図(1984年)

沖縄戦-きゃん岬(1986年)

沖縄戦-ガマ(1986年)

沖縄戦(読谷三部作)(1987年) チビチリガマ、 シムクガマ、残波大獅子。



これらを描いたのは、美術館のあゆみでも紹介した、丸木位里さん、丸木俊さんの夫婦の画家である。彼らは、『原爆の図』で世界的に知られ、最晩年に取り組んだ連作が今回のこの作品。埼玉から沖縄各地へ取材も含め、6年通い続け、沖縄で製作をする。どんなことがあっても生きなさいと言う、「命どう宝(命こそ宝)」に込めた切実な思いとタッチが描かれている。

実際に絵を遠くから見ると、部屋の壁が埋まるくらい大きい。常設展示されている、「沖縄戦の図」(下写真)を入れるために建てられた美術館であるという話を聞いて、中に入ってみたが、想像以上の迫力であった。ただ、近くで見ると、様々なストーリーを感じることができる。ガマの様子、集団自決している人、亡くなっている人、赤く染まる所は血であることが分かる。1枚の絵の中に物語があり、自分も実際にその中にいる様な感覚になるくらい、惹き付けられる作品であった。そして、この絵には丸木位里・俊夫婦が一文を書き残している。「恥ずかしめを受けぬ前に死ね。鎌で、カミソリでやれ。親は子を、夫は妻を、若ものはとしよりを。エメラルドの海は紅に。集団自決とは手を下さない虐殺である」。この言葉の意味を考えて欲しい。



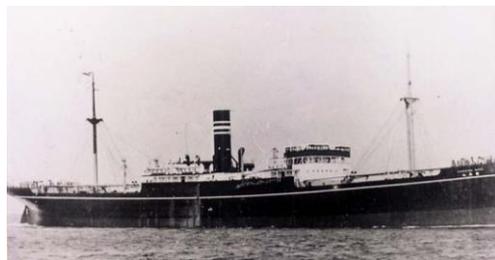
5. 対馬丸記念館（沖縄県那覇市若狭1丁目25番37号）

長崎に向けて出港した対馬丸は、1944年8月22日午後10時12分に鹿児島県・悪石島沖で米軍海軍潜水艦ポーフィン号の魚雷を受け沈没。船には疎開者が数多く乗船しており、氏名が判別している犠牲者は1,482名にも及ぶ（2015年5月31日時点）。このうち、学童疎開の犠牲者は784名に及ぶ。対馬丸事件の鎮魂と、子どもたちに平和と命の尊さを教え、事件を正しく後世に伝えるため、撃沈されてから60年目の2004年8月22日に開館した。記念館は、屋上までの高さが海面から対馬丸の甲板までの高さと同じであったり、入り口を2階に設け、タラップから艦に乗船するイメージで作ったりと、対馬丸を再現して設計されている。



疎開とは、攻撃目標になりやすい所に住む子どもやお年寄り、女性などを田舎に避難させることである。沖縄の場合は本土の安全なところに学校単位の集団で疎開したため、学童集団疎開といった。1944年7月7日にサイパン島の日本軍が全滅したことで、沖縄が戦場となる危険が出てきた。そこで政府は沖縄の子どもたちなどを県外に疎開させることを沖縄県に命じた。もう一つの疎開理由としては、沖縄で戦争が始まると人々が足手まといになることや、沖縄の食糧事情があった。

対馬丸は建造から30年たった木造の老朽貨物船で、船団の速度に追いつくのがやっと。子どもたちを安全に渡航させるためには、「疎開船は軍艦であること」が絶対条件であったが、実際には対馬丸をはじめとする貨物船3隻と護衛艦2隻だった。親たちは不安な気持ちで1944年8月21日に見送った。船内は蒸し暑く、とても眠れるような状態ではなかった。



対馬丸が船出した海ではすでに17隻が米軍の潜水艦によって沈められていたため、救命胴衣は肌身離さずつけていることが命じられた。そして、対馬丸は出航して27時間30分後の8月22日午後10時12分ごろに撃沈。対馬丸は上海を出発し、那覇港に入る前から攻撃の対象としてとらえられていた。

箱口令（かんこうれい）。「沈没の事実は決して語ってはいけない」という箱口令がしかれ、生き延びた者の苦しみが始まる。救助された人々は鹿児島県の山川港や鹿児島港に運ばれたが、救助船に気付かれなかった人は5日間にわたる漂流を強いられた。この苦労の上に生き残ってもこの事件については誰にも話すことができなかった。氏名が判明した生

6. 平和祈念公園 (沖縄県糸満市字摩文仁 444 番地)

平和祈念公園は本島南部の「沖縄戦終焉の地」糸満市摩文仁(まぶに)の丘陵を南に望み、南東側に険しく美しい海岸線を眺望できる台地にある。公園整備は琉球政府時代に着手し、復帰後 1972 年から都市公園として本格的な整備を進めている。公園内には沖縄戦の写真や遺品などを展示した平和祈念資料館、沖縄戦で亡くなったすべての人々の氏名を刻んだ「平和の礎」、戦没者の鎮魂と永遠の平和を祈る「平和祈念像」、そして摩文仁の丘の上には国立沖縄戦没者墓苑や府県、団体の慰霊塔が 50 基建立されている。国内外の観光客をはじめ、慰霊団、修学旅行生等が多く訪れる聖地であり、観光の要所ともなっている。そして世界の恒久平和を祈念し、平和の情報発信の機能を併せ持つ公園として整備を進めている。また、平和の広場で「平和の火」(右下写真)が灯されている。この波が表現するのは、「平和の礎」のデザインコンセプト「平和の波永遠となれ」である。



沖縄平和祈念堂は、沖縄県民はじめ全国民の平和願望、戦没者追悼の象徴として建設された。堂内には、沖縄県下の各市町村及び学童による募金活動の支援を受けて、沖縄が生んだ傑出した芸術家山田真山氏が 18 年余の歳月をかけて原型を制作した沖縄平和祈念像が安置されている。このほかにも西村計雄画伯が平和への思いを込めて制作された絵画「戦争と平和」(20 点連作、各 300 号)が堂内の壁面を飾り、敷地内には彫刻家佐藤忠良氏制作によるブロンズ製の「少年」の像をはじめ祈念堂の理念に賛同された日本画壇の第一線で活躍する画家から贈られた大作を展示する美術館などを設置している。沖縄平和祈念堂は“美と平和の殿堂”として沖縄県が建設した“平和の礎”と一体となって摩文仁の地から世界に向けて平和の尊さを訴えている。



平和の礎は、太平洋戦争・沖縄戦終結 50 周年記念事業の一環として、国籍を問わず、また、軍人、民間人の別なく、全ての戦没者の氏名を刻んで、永久に残すため、1995 年 6 月に建設したものである。その趣旨は、沖縄戦などで亡くなった全ての戦没者を追悼し、恒久平和の希求と悲惨な戦争の教訓を正しく継承するとともに、平和学習の拠点とするためである。なお、「礎



く(いしじ)」とは、建物などの基礎の「いしづえ」を沖縄の方言で「いしじ」と発音することに由来するもので、平和創造の「いしづえ」となることを期待して付けられ

たものである。2019年6月13日現在の刻銘者数は241,556人であり、今なお増え続けている。

全 学徒隊の碑は、沖縄戦において当時21あった旧制中等学校の生徒たちが「学徒隊」として戦場に動員された史実を後世に伝えるために建立された石碑である。記載されている生徒名は学徒隊として動員されたかにかかわらず、21校に在籍していた生徒で沖縄戦において犠牲になったことが確認できた全員分の人数（現在1983人）が記載されている。



以下は全学徒隊の碑に記載された碑文である。

戦前、沖縄には21の師範学校・中等学校がありました。沖縄戦では、これらすべての学校の生徒たちが戦場に動員されました。男子生徒は主に14歳から19歳で、上級生が「鉄血勤皇隊」に、下級生が「通信隊」に編成されました。鉄血勤皇隊は、軍の物資運搬や爆撃で破壊された橋の補修などにあたり、通信隊は、爆撃で切断された電話線の修復、電報の配達などの任務に従事しました。女子学徒は主に15歳から19歳で、陸軍病院や野戦病院などで負傷兵の看護活動にあたりました。激しい戦果の中、多くの生徒が犠牲になりました。このことを広く伝え、世界の恒久平和を願い、ここに全学徒隊の碑を建立します。

摩 文仁の丘は沖縄戦の終結の地である。現在は「平和の公園」として整備されているが、かつては米軍と日本軍の死闘が繰り広げられた場所であった。1945年4月、陸軍第32軍が司令部を置く首里近郊にまで米軍が迫り、司令部では本土決戦の時間稼ぎのために戦線を後退させても戦闘を続行すべきであるとして南部後退の方針を固めた。そして6月1日にこの地の洞窟に後退した。首里からの撤退は多くの民間人も巻き込んでおり、その道中には米軍の爆雷により遺体が野ざらしにされていた。それはまさに地獄そのものであったといわれる。摩文仁の丘に到着した陸軍第32軍は10万の兵力から3万に減っていた。しかもその半数が軍人ではなく臨時招集された県民であった。陸軍による作戦変更は結果的に多くの住民を巻き込み、それにより引き起こされた悲劇はあまりにも深刻なものであった。6月22日には摩文仁の丘司令部洞窟周辺にまで米軍が迫り洞窟の上部である山頂部も制圧された。そして23日に牛島中将と長参謀長が割腹自殺を果たし、7月2日に米軍の琉球作戦終了が宣言された。

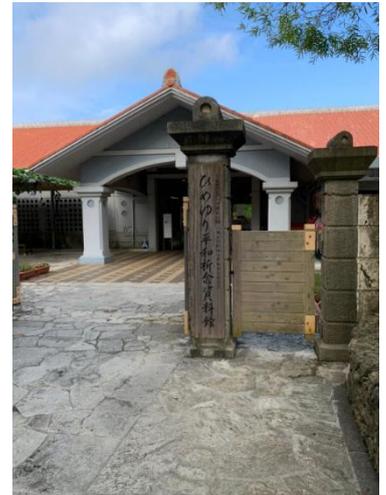


7. ひめゆり平和祈念資料館 (沖縄県糸満市字伊原 671-1)

沖縄県糸満市にある、ひめゆり平和祈念資料館は、ひめゆり学徒隊の生存者たちが戦争の悲惨さや平和の大切さを後世に伝えていくために、1989年6月23日に設立された資料館である。元ひめゆり学徒隊の同窓会等と募金等により設立することができた。資料館の初代館長は、ひめゆり学徒隊の引率教師であった中宗根政善さんである。現在の館長は元ひめゆり学徒隊の本村つるさんが務めている。



資料館は第一展示室から第六展示室まであり、動員される前の生徒たちや教員の学校生活の様子から、学徒たちの戦場での仕事内容や持ち物、そして証言が展示されている。第二展示室と第三展示室におかれている学徒たちの証言は、誰でも見やすいように大きな本上に展示されている。中でも第一展示室に展示されている『「戦場」への動員 240人』は240人の生徒や教員の顔写真がすべて展示されている。その写真の下には一人一人がどのような人であったか、どこで動員されたのか、どこで亡くなったのかが詳しく書かれている。その説明が一人一人の生きた証として刻まれている。



2004年4月に資料館の全面的な展示リニューアルが行われた。元学徒隊が証言員として交代制で自身の戦争体験を語っていた。従来の資料館は証言員がいたために、展示物の説明文を重要視していなかった。しかし、証言員の高齢化に伴い語っていくことが難しくなってきた。こうした背景から証言員が語るができなくなった後でも、戦争体験を後世にしっかりと伝えていくために、説明文を重視し展示のリニューアルが行われた。

ひめゆり学徒隊の「ひめゆり」は沖縄県師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の交友会誌の名前に由来する。沖縄県師範学校女子部は「白百合〈しらゆり〉」で沖縄県立第一高等女学校は「おとひめ」と交友会誌が名づけられていたが、両校が併設校となるにあたって、交友会誌を統一し「ひめゆり」と名付けられた。「ひめゆり学徒隊」と呼ばれるようになったのは戦後であった。

ひめゆり学徒隊は沖縄県師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒と教師によって、構成された看護助手の部隊である。1945年6月23日、米軍の沖縄上陸に向けた猛攻撃である、艦砲射撃が開始された夜に動員命令が出された。生徒222名、教員18名が南風原の陸軍病院に動員されたが、そのうち136名が戦場で命を落とした。

ひめゆり学徒隊の主な仕事内容は、炊事・壕掘り・衛生材料や食事や水の運搬・患者の看護や救護・手術の助手・食料調達・死体の埋葬・伝令であった。戦線が悪化していくにつれ、負傷兵の手術が頻繁に行われたが、麻酔なしの手術であり、そのほとん

どが足や腕の切断であった。手術の助手として手術代を照らすためにろうそくを持ったり、痛みには耐えきれずに暴れだす患者を押さえつけることもあった。手術後に切断された足や腕を砲弾の飛び交う中、捨てにいかされることや、亡くなった兵士の埋葬のために砲弾の飛び交う中、外に行くこともあった。

戦況が悪化すると、ひめゆり学徒隊は南風原陸軍病院を出て、沖縄県本島最南部の伊原周辺に集まってきた。そこでもガマを陸軍病院として使ったが、次第に医療器具や医薬品もなく、病院としての機能が失われていった。そして1945年6月18日の夜に学徒たちに、自らの判断によって行動するようにと解散命令が下された。この解散命令後に米軍の攻撃によって多くの学徒や引率の教員の命が失われた。

太平洋戦争によって、数多くの命が奪われた。ひめゆり学徒隊のみならず、沖縄県内の学校に通う生徒たちが数多く動員され、尊い命が奪われた。彼女や彼らの年齢が近いという点もあり、「もし自分が、彼らや彼女たちと同じ立場であったら？」と自分事としてとらえ、平和学習の場として、このひめゆり平和祈念資料館を訪れ、「ほんとうの平和とは何か？」と生徒とともに考えてほしい。また、ひめゆり学徒隊の生徒に目線が行きがちだが、動員された教師の判断により、多くの生徒たちの命が助かり、その反対に多くの命が失われた。ぜひともひめゆり学徒隊を引率した教員にも目を向け、「教育者としての責任とは何なのか」と考えてほしい。

生存者たちの証言

「十分な麻酔もしないで手足切断」津波古ヒサ（旧・岸本ヒサ）当時 17歳 師範本科1年

戦況が激しくなると内科は廃止され、第二外科に名称は変わりました。私たちの仕事は、手術で切断する手足を持つ役目です。麻酔はエーテルを嗅がせるくらいで、切断される患者の手を握り、押さえつけて「頑張って下さい」と励ますのです。しかし大変ですよ。切断したら、その握っていた手が離れないんですよ。「アキサミヨー」と必死に外しましたがね。未だ熱もある切断した手足を大急ぎで何かに包んで、汚物入れ箱に捨てていました。肩の手術は椅子に座らします。弾が貫通した軍曹でしたが、麻酔なしで肉を切ったんです。肉の暑さ3センチ、長さ10センチ位です。鋏で10回位で切っていましたが、悲鳴は上げないが額は油汗、涙はポロポロなんですね。手を握ろうとしたら断って、自分で自分の手を握りしめていましたね。

「春子姉さん」運天文子（旧・我那覇文子）当時 17歳 師範予科3年

豪入り口はもうボンボンボン攻撃されているんです。軍医3名ぐらいいたんですよ。この方たちに、「何をそこでまごまごしているか。ここは、病人以外は残ってはいかんぞ。早く出ていけ」と怒鳴られたもんですから、「春子姉さん。私たちはもうこれ以上ここに居れない。これから出ていくけど、助かるという保証もないのよ。ここには軍医もついているし、ここが一番安心な場所だから安心してここにいてよ。私たちも死にに行くんだよ」と言ったら、春子姉さんは、「駄目。駄目」と引っ張って仕様がななんです。それを私は押し切って出たんですけど、また後ろに引き返して手を握りしめたあけですよ。私は「春子姉さん、さようなら」と、あとは振り向きもしないで出て行ったのです。

8. 南風原文化センター（沖縄県島尻郡南風原町字喜屋武 257）

南風原（はえばる）文化センターは元々、給食センターとして使用されていた。しかし生徒数の増加から、給食センターが手狭になり移転することが決まった。その跡地を利用するにあたって、「図書館」、「美術館」、「資料館」などが候補として挙がっていた。南風原町では都市化が急激に進んだために、伝統的な歴史や文化が急速に少なくなっていた。これらが無くなってしまいう前に収集し、保存することが課題として挙げられたため、街の歴史や文化を収集し、新たな文化を創造する教育文化施設として、1989年に「南風原文化センター」が開館した。



南風原文化センターの館内展示は、「南風原の沖縄戦」、「戦後・ゼロからの再建」、「移民」、「人々の暮らし」の4つのテーマに分けられる。

右の写真は実際に陸軍病院壕での手術の様子を展示したものである。右奥が軍医、左前はひめゆり学徒隊の生徒である。麻酔なしの手術のため、彼女たちは暴れてしまう患者の体や手足を押さえつけたり、切断した足や腕を砲弾が飛び交う中に捨てに行っていた。



負傷した兵隊たちは、通路に置かれた木製の二段ベットの寝かされていた。手術後も痛みを苦しむ兵隊を、ひめゆり学徒隊は熱心に看病した。彼女たちが通路を歩くと「学生さん」と呼ばれ腕をつかまれたそうだ。画像に写っているおにぎりは、はじめはテニスボールくらいの大きさだったが、戦況が悪化していくとピンポン玉の大きさになった。朝晩2回あった食事も、途中から1回になってしまった。

5月の下旬に戦況の悪化から、陸軍病院壕に撤退命令が下された。しかし重症患者は連れて行くことができず、医師や看護師から青酸カリ入りのミルクを飲まされ、自決の強要が行われた。その現場を撤退準備をしていたひめゆり学徒の生徒が目撃した。また、右の画像のように青酸カリ入りのミルクを配られたと証言している兵隊もいた。

館内展示では平和学習の場として、ワークシートを用意している。館内の展示を見ながら問いに答えていく方式であり、学びが深まる工夫がされている。



館内には戦時中から戦後の状況がわかるものが数多く展示されている。ここではその一部を紹介する。

①奉安殿：各学校に置かれていたもので、この中には「教育勅語」など学校で重要に保管されなくてはならないものが入れられていた。子どもたちがこの前を通る際にはお辞儀をしなくてはならなかった。



②ガラス瓶：高熱で変形したガラス瓶の実物が展示されている。

③弾が貫通している塀：砲弾が貫通した塀がそのまま展示されている。この塀に隣接していた水タンクに集まっていた5人の青年のうち、2人が砲弾によって即死した。

④戦車：実際に使用されていた戦車の展示。展示されているのは「M4A2 中戦車」。



沖 繩陸軍病院南風原壕 20号は、実際に負傷した兵士の手術や看護が行われた場所である。この壕は、ひめゆり学徒隊の兵士たちも、この陸軍病院に看護助手として動員された。長さは約70メートルの人工の横穴号である。高さは約1.8メートルで、通路はS字のようにくねくね曲がっている。これは敵が侵入してきたときに、入り口から各部屋を把握できないようにするためである。当時、患者の治療に対して、医師は「薬がもうない」と説明したようだが、実際には医薬品は存在しており、壕の入り口付近に医薬品が隠すように埋められていた。

壕内部はヘルメットをかぶり、手持ちの懐中電灯を持ち、ガイドの案内によって見学できる、壕内の空気感の外とは全く違っており、じめじめとして生ぬるい。壕内はライトをつけなければ真っ暗で何も見えない状態である。通路は、2人並んで歩くのがやっとであり、かがまなければ通れないほど天井が低くなっているところもある。壕の天井には「姜」の文字が刻まれた箇所があるが、これは入院していた朝鮮兵が刻んだものではないかと言われている。ガイドの指示で懐中電灯を消してみると、光が全くない状態になり、壕内の暗さを実感することができる。消した途端に真っ暗になり、誰がどこにいるのか分からない状況だったため、たった数秒であっても怖さを感じた。一方で、壕を出ると壕内の雰囲気とは打って変わり、目の前の野球場では、少年野球が楽しい雰囲気で行われていた。

ひ めゆり学徒隊の生徒たちは昼夜問わず、この壕で働いた。手術の助手や患者の看護だけではなく、壕を出て山を下った先にある炊事場所から壕を繋ぐ「飯上げの道」(右写真)を歩き、食事の運搬も行った。銃弾が飛び交う中、ひめゆり学徒たちは懸命に「飯上げの道」を歩いた。



参照文献・資料等

・朝日新聞社「知る沖縄戦」

1. 首里城

・首里城公園「首里城について」、<http://oki-park.jp/shurijo/about/>

2019年11月6日閲覧

2. 旧海軍司令部壕

・旧海軍司令部壕事業所「旧海軍司令部壕」 <http://kaigungou.ocvb.or.jp/top.html>

2019年11月21日閲覧

3. 嘉数高台

・「那覇市公式ホームページ」

<https://www.city.naha.okinawa.jp/kurasitetuduki/collabo/heiwa/heiwahasshintosi/onlinetaiken/kakazu.html> 2019年11月24日閲覧

・「沖縄観光チャンネル」 <https://www.odnsym.com/spot/kakazu.html>

2019年11月24日閲覧

4. 佐喜真美術館

・「佐喜真美術館」 <http://sakima.jp/> 2019年11月24日閲覧

・「佐喜真美術館のパンフレット、命どう宝のパンフレット」より

5. 対馬丸記念館

・公益財団法人対馬丸記念会『対馬丸記念館公式ガイドブック』, 2015

6. 平和祈念公園

・県営平和祈念公園 kouen.heiwa-irei-okinawa.jp/ 2019年11月23日閲覧

・WEB 沖縄民報 <https://okinawaminpo.localinfo.jp/posts/2633957>

2019年11月23日閲覧

7. ひめゆり平和祈念資料館

・ひめゆり平和祈念資料館「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」(2016) 公益財団法人
沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団

・ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 「ひめゆり平和祈念資料館」(2004) 公益財団法人
沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会

8. 南風原文化センター

・吉浜忍(2010)『沖縄陸軍病院南風原豪』高文研

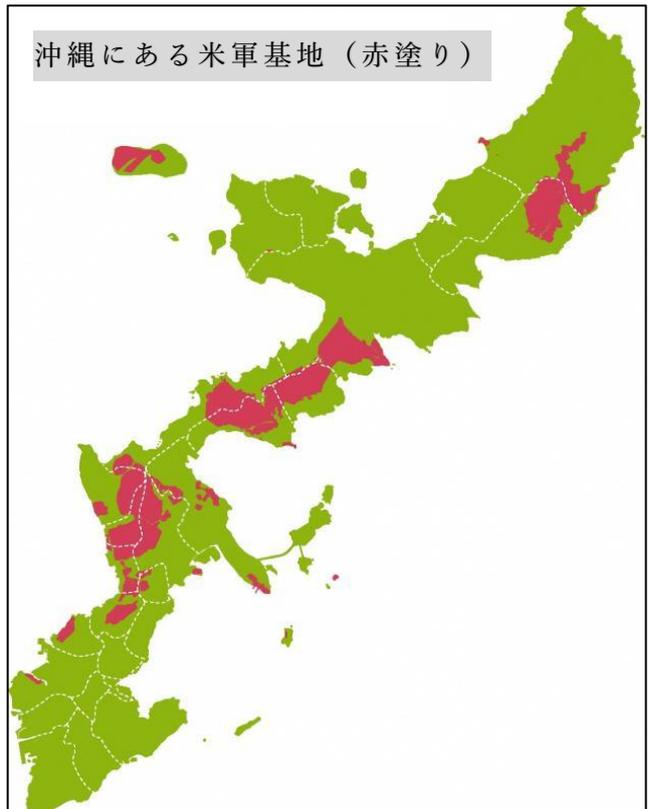
第 2 章 基地問題

沖縄には 1972 年に本土復帰した後も、多くの米軍基地が置かれ続けています。現在でも沖縄本島の約 15% の面積を米軍専用施設が占めています。日本全体の米軍専用施設面積の割合で見ても、沖縄は 70.6% です。米軍専用施設であるため、日本人が自由に行き来することはできず、基地の回りはフェンスで囲まれています。沖縄が過重な負担を強いられているのが現状です。さらに、これらの基地がある場所にはもともと住民がいた場所で、米軍は強制的に土地を奪い取っていきました。住民の意思とは関係なく基地が次々と建設されたなか、米軍機による事故や米兵による犯罪などが後を絶ちません。これら、基地問題に関する歴史や、現状、沖縄国際大学での交流をまとめました。

1. 基地問題の歴史

沖縄は太平洋戦争において、激しい地上戦が行われ、「鉄の暴風」と呼ばれたほどのすさまじい爆弾投下と砲撃を受けた。沖縄に上陸した米軍は、住民たちを収容所に強制隔離し、土地の強制接収を行った。そして、住民から奪った土地に、次々と新しい基地を建設していった。朝鮮戦争が始まると、1951年以降、米軍は土地の取り上げに抵抗する住民たちに銃剣を突きつけ、強制的に排除、民家と農地をブルドーザーで押しつぶし、基地を拡張していった。

本土では復興政策が図られる中、戦後から5年近く沖縄はほとんど放置状態だった。1952年にサンフランシスコ講和条約により日本は独立国としての主権を回復するが、その代償として、沖縄は本土から分断され、米軍の施政権下に置かれた。その後、沖縄は1972年の本土復帰までの27年間、日本政府から十分な支援を受けることができなかった。高度経済成長が始まると、本土の米軍基地の整理縮小の流れを受け、本土から沖縄に海兵隊の移転が進められた。このことから、沖縄の本土復帰後も、沖縄には多くの米軍基地が日米安全保障条約に基づく提供施設・区域として引き継がれ、現在も沖縄は過重な基地負担を背負わされている。



基地問題の動向

1945年	沖縄戦で、県民の4人に1人が死亡。米軍による占領を受ける。
1952年	サンフランシスコ講和条約が発効。日本は独立するも、沖縄は日本から切り離され、米軍の支配下に置かれる（日米行政協定）。
1960年1月	日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約が改定。（日米地位協定も附属）。
1972年5月	沖縄の本土復帰。
1995年9月	米兵3人による12歳少女暴行事件が発生。これを契機に米軍基地に反対する運動や普天間飛行場の早期返還を要求する運動が起こる。

1996年4月	橋本総理・モンデール駐日米国大使が普天間飛行場の5～7年以内の全面返還に合意（県内に移すことが前提）。
9月	県民投票で89%が基地縮小に賛成。
12月	SACO(沖縄に関する特別行動委員会)最終報告に普天間基地の返還と代替基地の建設が盛り込まれる。
1997年12月	名護市における米軍ヘリポート基地建設の是非を問う県民投票。反対派が54%。
1999年11月	稲嶺知事が名護市辺野古沿岸海域を普天間飛行場の移設先と発表。
12月	岸本名護市長が7項目の条件付きで移設受け入れを表明。
2006年4月	島袋名護市長「普天間飛行場代替施設の建設に係る基本合意書」に署名。
2009年8月	国政選挙において、鳩山民主党首が「最低でも県外」と発言。
2010年1月	名護市長選で、稲嶺氏が「辺野古の海にも陸にも新しい基地は造らせない」という公約を掲げ、当選。
4月	普天間飛行場の県外移設等を求める県民大会が開催され、41全市町村長が参加（9万人）。
11月	沖縄県知事選挙、仲井真氏が県外移設を掲げ再選。
2012年4月	2プラス2共同文書発表、辺野古案を「これまでに確認された唯一の解決策」と記述。
9月	「オスプレイ配備に反対する県民大会」が宜野湾市の宜野湾海浜公園で約10万1千人が参加して開かれ、オスプレイ配備計画の撤回と普天間飛行場の閉鎖・撤去を訴えた。
10月	米軍が垂直離着陸輸送機オスプレイの普天間飛行場への配備を開始。
2013年1月	県内41市町村の代表らがオスプレイの配備撤回や普天間飛行場の閉鎖・撤去・県内移設断念を求める『建白書』を安倍首相に提出。
4月	日米が嘉手納基地以南の6施設・区域の統合計画に合意、普天間は辺野古を前提に「2022年度またはその後に返還」と表記。
2014年1月	名護市長選で、辺野古移設反対派で現職の稲嶺氏が再選。
11月	沖縄防衛局が辺野古の海底ボーリング調査を開始（本格的な海上調査は埋立承認後初めて）。
11月	沖縄知事選で新基地建設阻止を掲げた翁長氏が辺野古推進の仲井真氏に約10万票の差をつけて初当選。
2015年10月	翁長知事が沖縄防衛局に対し埋立取消通知書を発出。
11月	政府、翁長知事による埋立取消しは違法とし、埋立承認取消しを撤回する「代執行訴訟」を福岡高裁那覇支部に提起。

2016年3月	代執行訴訟等について、沖縄県と国で和解が成立、国は辺野古沖の工事を中断。 翁長知事の埋立承認取消に対し、石井国交相が是正指示。
7月	国交相の是正指示を不服として、沖縄県が審査申し出。 国交相の是正指示に応じないのは違法として、国が不作為の違法確認訴訟を福岡高裁那覇支部に提起。
9月	訴訟に対し、国の請求を認める判決。 判決を不服として、沖縄県が最高裁判所に上告。
12月	不作為の違法確認訴訟、最高裁判所が上告を棄却。 翁長知事が埋立承認取消しを沖縄防衛局に通知。
2017年4月	沖縄防衛局がキャンプ・シュワブ内で護岸工事に着手。
7月	沖縄県が岩礁破碎等行為の差し止め請求を那覇地方裁判所に提起、併せて仮処分命令の申し立ても実施。
8月	2プラス2共同文書発表、辺野古案が「唯一の解決策であることを再確認」と記述。
2018年9月	知事選で新基地建設阻止を掲げた玉城デニー氏が初当選。
12月	沖縄防衛局が辺野古沖合への土砂の投入を開始。 沖縄県は岩礁破碎等行為の控訴審判決に対し上告受理申し立てを行う。

これら、基地問題に大きく関係しているのが、アメリカとの間に結ばれている「日米地位協定」である。

1-2. 日米地位協定とは

日米地位協定は1960年1月19日に改定された日米安保条約の第6条に基づくもので、全28条からなる。また、その内容は大きく3つに分けられる。

日米安全保障条約（現行）第6条

日本国の安全に寄与し、並びに極東における国際の平和及び安全の維持に寄与するため、アメリカ合衆国は、その陸軍、空軍及び海軍が日本国において施設及び区域を使用することを許される。

前期の施設及び区域の使用並びに日本国における合衆国軍隊の地位は、1952年2月28日に東京で署名された日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約第3条に基づく行政協定（改正を含む）に代わる別個の協定及び合意されるほかの取り組みにより規律される。

(1) 基地の提供

米軍は日本全土に基地を置くことができ、「移動」のため日本中の陸海路、空域を使用できる。基地返還の際、現状復帰の費用は日本が負担。さらに日本側は地代など、基地の費用負担を分担する。

(2) 基地の管理

米軍は提供された基地を排他的に管理し、火災や環境汚染などが発生しても日本側当局者は許可なしに立ち入れない。米軍は基地内に自由に施設を建設でき、どのような部隊も配備できる。無通告での訓練も可能。

(3) 米軍・軍属の特権的地位

国内で米兵や軍属が犯罪や事故を起こしても、「公務中」であれば米軍が第1次裁判権を有する。被害者への補償は「公務外」の場合は示談が行われるが、その多くは泣き寝入りになる。その他にも、納税や高速道路の利用料免除、旅券なしで出入国可能など、多くの特権が存在する。

日米地位協定に定められた米軍の特権

- 2条 日本全土で基地の使用が認められる。自衛隊基地の使用も認められる。
- 3条 提供された基地の排他的管理権を有し、自由に出入りできる。
- 4条 基地の返還の際、米側は現状回復・補償の義務を負わない。
- 5条 民間空港・港湾、高速道路に出入りできる。利用料は免除。
- 6条 航空管制の優先権を与える。
- 7条 日本政府の公共事業、役務を優先的に利用できる。
- 8条 日本の気象情報を提供する。
- 9条 旅券なしで出入国できる。
- 10条 日本の運転免許証なしで運転できる。
- 11条 関税・税関検査を免除。
- 12条 物品税、通行税、揮発油税、電気ガス代を免除。
日本が基地従業員の調達を肩代わり。
- 13条 租税・公課を免除。
- 14条 身分証明書を有する指定契約者は免税などの特権を得る。
- 17条 「公務中」の事件・事故で第1次裁判権を有する。
- 18条 被害者の補償は「公務中」で75%支出、「公務外」は示談。
- 24条 基地の費用を分担。日本政府の拡大解釈で「思いやり予算」の根拠になる。
- 25条 日米合同委員会の設置。

日米地位協定には、この前身である日米行政協定（52年4月発効）が定めている米側の全面的な裁判権行使や、無制限の基地管理権など、その内容のほとんどが引き継がれており、今日まで一度も改定されていない。その結果が、現在の沖縄の不平等な現状を生んでいる。普天間基地（沖縄）と横田基地（東京）に配備されている米軍機オスプレイ（垂直離着陸機）は航空法で義務付けられている自動回転機能を有しておらず、同法施行規則に基づく「耐空証明」を受けられないため、本来なら国内で飛行できない。しかし、同機は日本全土を自由勝手に飛んでいる。こうした状況を一日でも早く改善するためには、同法の改定に向けて、日本全体で声をあげていく必要がある。

2. 日本における米軍基地

現在、日本全土には78の米軍専用施設があり、共同施設（米軍が一時的に使う自衛隊基地）を含む場合は131にも及ぶ。下記の表1によると、全体の米軍専用施設（78施設）に占める沖縄の割合（31施設）は約39%となり、「施設数」という点で比較すると、本土の方が施設数は多い状況である。しかし、この場合4千㎡の入間飛行場、36,590千㎡の北部演習場も同じ「1施設」としてカウントすることになる。嘉手納弾薬庫が隣接、200機近くの軍用機が常駐する嘉手納基地も「1施設」となる。面積や機能が全く異なるにも関わらず、施設数で比較するのは一概に平等とは言い難い。表1のように、米軍専用施設の全体面積に占める割合で比較すると、約70%の面積が沖縄県に置かれている現状を理解することができる。表2の都道府県別面積で比較すると、各都道府県と沖縄県の基地負担の差が目に見えてわかる。日米地位協定では、2条4項aで「米軍の管理する施設の日本側の共同使用」、同bで「日本側の管理する施設の米軍使用」を定めている。在日米軍専用施設面積にはaの施設を含むが、bは含まれない。bを含む場合、防衛省は「在日米軍施設」と呼ぶ。沖縄は在日米軍専用施設面積の「約74%」を占めるが、bの施設が少ないため、在日米軍施設面積で言うと「約23%」と割合は小さくなる。

表1) 在日米軍施設・区域（専用施設）面積 2019年3月31日現在

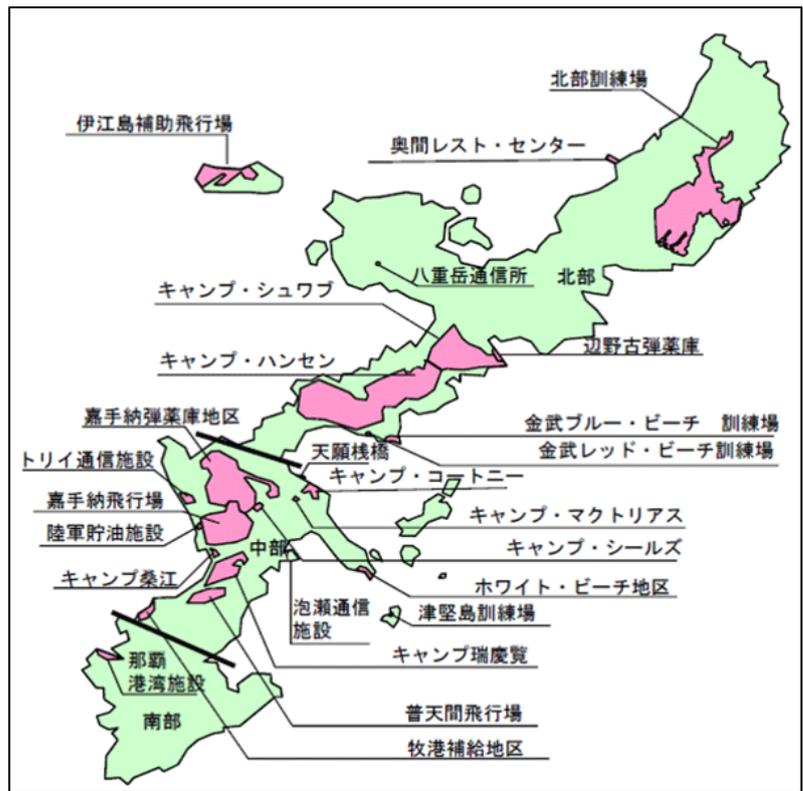
区分	施設・区域数	面積	全体面積に占める割合	国土（県）面積に占める割合	
全体	78施設・区域	263,176千㎡	100%	0.07%	
内訳	本土	47施設・区域	78,231千㎡	29.73%	0.02%
	沖縄	31施設・区域	184,944千㎡	70.27%	8.11%

表2) 在日米軍施設・区域（専用施設）都道府県別面積 2019年3月31日現在

都道府県	面積	全体面積	都道府県	面積	全体面積
北海道	4,274千㎡	1.62%	京都府	36千㎡	0.01%
青森県	23,743千㎡	9.02%	広島県	3,538千㎡	1.34%
埼玉県	2,035千㎡	0.77%	山口県	8,672千㎡	3.30%
千葉県	2,095千㎡	0.80%	福岡県	23千㎡	0.01%
東京都	13,193千㎡	5.01%	長崎県	4,686千㎡	1.78%
神奈川県	14,731千㎡	5.60%	沖縄県	184,944千㎡	70.27%
静岡県	1,205千㎡	0.46%			
合計	263,176千㎡				

3. 沖縄における米軍基地の現状

沖縄県には 31 の米軍専用施設があり、その総面積は 1 万 8609 ヘクタール、本県の総面積の約 8%、人口の 9 割以上が居住する沖縄本島では約 15%の面積を占めている。現在は、国土面積の約 0.6%しかない沖縄県に、全国の米軍専用施設の約 70.6%が集中している。また、沖縄県を除く全国の米軍施設・区域では、約 87%が国有地だが、沖縄県では約 23%が国有地、残り約 77%が県有地、市町村有地、民有地となっている。これは前節にあるように、県外の米軍基地の大半は戦前の旧日本軍の基地をそのまま使用しているのに対し、沖縄県では旧日本



日本軍が使用した区域だけでなく、沖縄戦後も米軍による公・民有地の強制接収が行われたことが背景にある。沖縄県の米軍基地は、単に面積が広大であるばかりでなく、その所有形態においても、他の都道府県の米軍基地とは経緯を異にしているのが特徴である。(2018年1月1日現在)

沖縄本島中南部都市圏には、県民の 8 割以上（約 120 万人）が暮らし、その面積・人口は北九州市や広島市などの政令指定都市に匹敵する都市圏となっている。米軍基地が所在する中南部都市圏の 9 市町村には、市街地を分断する形で米軍基地が存在し、その割合は当該市町村面積の約 22.6%に及ぶ。また、これらの米軍施設・区域は民有地が約 88%を占めている状況である。例えば、「世界一危険」と言われる普天間飛行場は、宜野湾市の市域面積の約 25%を占めているだけでなく、宜野湾市のほぼ中央に位置し、同市を東西に分断している。米軍基地の存在は交通機能、産業機能の集積に弊害をもたらすだけでなく、長期的な都市形成・地域振興を実現していく上で大きな障害となっている。

普天間基地→



在日米軍再編においては、宜野湾市の普天間飛行場や浦添市の牧港補給地区など嘉手納飛行場より南の施設・区域の返還が、日米両政府により合意されている。米軍基地の返還によって、跡地の有効活用が可能になり、沖縄全体の今後の振興・発展につながっていくことが期待される。

3-2. 沖縄における米軍基地関連の事件・事故

社民党要求・防衛省提出の「沖縄の米軍人などによる事件・事故数及び賠償金支払い実績」によると、沖縄における米軍基地関連の事件・事故は、2005年には「1012件」あった。同じ年、北海道では3件、東北178件、北関東144件、南関東、近畿0件、中国・四国50件、九州34件だった。そのうち、賠償金が支払われたのは148件に過ぎず、多くの人は泣き寝入りを強いられている。

また、防衛省作成の統計の注記には、「発生件数は防衛省が地位協定第18条にもとづく請求の処理を所掌する職務上の観点から必要となる米軍の事件・事故等件数を集計しているものであり、すべてを網羅したものではない。ただし、地位協定第18条の手続きに至らなかったものも含んでいる」とある。下記の表に挙げている事例はほんの一部であり、統計に含まれていない事件・事故も数多く存在する。

このように、米軍は危険な飛行を繰り返し、数多くの犯罪や事故を起こしても逮捕されない。これらの現状の背景には、日米地位協定における米軍特権が存在する。

沖縄県における米軍基地関連の事件・事故

1959年6月	宮森小学校米軍機墜落事故。
1972年8月	宜野湾市大謝名で米陸軍兵が日本人女性を殺害。
1972年9月	キャンプ・ハンセン基地内で、米兵が基地従業員をライフルで射殺。
1974年10月	名護市辺野古でキャンプ・シュワブ所属海兵隊員が、日本人女性を殺害。
1982年3月	金武町金武区の墓地で、米海兵隊員が日本人男性をブロックで殴打し、死亡させた。
1989年11月	辺野古崎の南東2~3キロの海上にヘリが墜落。
1991年6月	沖縄市嘉間良の公園内で、キャンプ瑞慶覧所属の米海兵隊員2人が日本人男性を殺害。
1993年4月	金武町金武の繁華街で、キャンプ・ハンセン所属の米海兵隊員が日本人男性を殺害。
1994年11月	着陸に失敗したヘリがキャンプ・シュワブ内に墜落。
1995年9月	米兵3人が12歳の少女を拉致し、集団暴行する事件が発生。
1996年1月	北谷町の国道で、歩道を歩いていた母子3人が海兵隊兵士(20)の乗用車にはねられ、3人とも死亡。
1998年10月	北中城町で米兵による女子高生ひき逃げ死亡事件が発生。

2004年8月	沖縄国際大学構内に普天間飛行場を離陸した CH-53 米軍ヘリが墜落。
2008年8月	うるま市田場の道路で、車を運転していた米海軍所属の女性は対向車線に進入し、向かってきた 30 代男性が運転するバイクと衝突し、死亡させた。
10月	米海軍所属の女性は「公務中」として不起訴処分。 嘉手納飛行場エアロクラブに所属する米軍所有の小型飛行機が名護市真喜屋のサトウキビ畑に墜落炎上。
2011年1月	沖縄市の国道で、車を運転していた米軍属が対向車線に進入し成人式のため帰省していた 19 歳男性が運転する車と正面衝突、死亡させた。 米軍属は「公務中」として不起訴処分。
2012年8月	那覇市で、海兵隊員が歩行中の女性を背後から引き倒し、わいせつな行為をして怪我を負わせた。
2013年5月	嘉手納基地所属の F-15 戦闘機が国頭村安田の沖合に墜落。
8月	軍嘉手納基地所属の HH60 ヘリが、宜野座村松田のキャンプ・ハンセン内に墜落。
2015年8月	米陸軍所属の MH60 ヘリが、うるま市沖合で米海軍艦船に着艦失敗。
2016年9月	嘉手納基地を離陸した AV-8 が、沖縄本島東沖の海上に墜落。
2017年12月	緑ヶ丘保育園の屋根に CH-53 大型輸送ヘリの部品が落下。 普天間第二小学校の校庭に CH-53 大型輸送ヘリの窓が落下。

このように一部ではあるが、様々な事件・事故が起こっていることが分かる。この中から、2017年12月に緑ヶ丘保育園の屋根にヘリの部品が落下した事故に関して、実際に緑ヶ丘保育園に伺い、その現場について説明をいただくことができたため、詳しく見ていく。2004年8月に起きた沖縄国際大学での事故については P.37 で見ていく。

3-3. 緑ヶ丘保育園

1964年に創立された緑ヶ丘保育園は、キリスト教精神で保育することを目標としている。大事な幼児期に、神と人に愛される子どもとなるように育てることは、人格形成の上で大事だと考えている。幼児の感性を育てるにはさまざまな方法があるが、人間に大切な「生活する力」を養うために、当園が重要としているのが下記の取り組みである。

1. まず、人間関係を大切にします。違う年齢の幼児が一つになって生活し、助け合い、泣いたり、泣かされたり、人の気持ちを思いやることのできる心を育てる。
2. 毎日の生活の中で、自分のことは自分でできるように育てる。
3. いろいろな道具を使い、工夫して作ったり、自然の中で思いきり遊べるようにする。
4. お話を聞いたり、絵本の読み聞かせを通して思考力・想像力を養い、はっきり自分の意見が言えるようにする。
5. 飼育小動物の世話やお花など、自然や生き物とふれあいを大切にする。

緑ヶ丘保育園では、神谷武宏園長および職員により、子どもの主体性や生活力の育成を目指す保育が実践されている。また、上記の3にあるように、当園は園児をなるべく外で遊ばせる点に力を入れている。園庭は子どもたちが「安全に」遊ぶ場所として欠かせないところ。しかし、「安全」であるべき保育園の園庭に空から雨以外のものが降ってきた。それがヘリの落下物であった。

2019年11月9(土)に北海道クリスチャンセンターで行われた、神谷武宏園長の講演「なんでおそらからおちてくるの?」をもとに事件について、私たちが考えたことについて、まとめる。

<事故の概要>

- ・2017年12月7日、午後10時20分頃、空から筒状の透明なガラスのようなものが激しい音とともに落ちてきた。(長さ約10cm、直径8cm、厚さ3mm、重さ213gの米軍ヘリのプロペラカバーと判明)
 - ・米軍は翌日の8日に、落下物の「部品」はCH-53大型輸送ヘリの部品であることは認めたと、飛行中の機体から落下した可能性は「低い」と説明。この米軍の発表の後、誹謗中傷の電話やメールが保育園と教会に来るようになる。
- *1週間後の12月13日、普天間第二小学校の校庭に米軍ヘリから窓枠が落下する事故が発生する。「米軍側が事故を事故だと認め、向き合っていたら」、「防衛局・防衛相が強くと米軍側に抗議していたら」、普天間第二小学校の事故は防げたのではないかと。「あと、数メートル数センチずれていたら?もし、尊い命が失われていたら?」ということを考えさせられる事故であった。



落下物



落下物が落ちてきた場所

<父母会が立ち上がる 嘆願書作成、署名活動> 年表参照

- ・署名は第一期(10日間)27632筆
- ・「嘆願書」をもって、沖縄防衛局、外務省沖縄事務所、県庁、県議会、宜野湾市長面会、市議会、米国領事館、各政党事務所などを訪問。
- ・2月13日、14日東京政府要請行動へ

嘆願書の要望

1. 事故の原因究明、および再発防止
 2. 原因究明までの飛行禁止
 3. 普天間基地に離発着する米軍ヘリの保育園上空の飛行禁止
- ・2018年4月には、緑ヶ丘保育園の在園児保護者、卒園児保護者、卒園生、職員、元職員など緑ヶ丘保育園にゆかりのあるメンバーで構成する組織「チーム緑ヶ丘1207」を発足。子どもたちの命・空を守るために「保育園上空を飛ばないで」と訴える活動を行っている。
 - ・その他マスコミの取材や日本各地での公演活動、平和学習のイベントなどを実施。

<基地問題から平和を考える>

事故当時の保護者の声

- ・「もし、自分の子どもが通っている保育園に落ちたらと考えて欲しい。何もなくてよかったでは終わらせないでください。」
- ・「人命が失われるまで米側のこのような状態に耐えて生活をしなければならないのでしょうか。どうか人命が奪われる前に飛行禁止を嘆願致します。」
- ・「保育園の出来事は他人事ではなく、ぜひ自分のこととして考えて頂きたい。同じ子を持つ親ならば見過ごすことはできないと思います。」

1981年から2016年末までの米軍関係の航空機関連事故件数は709件となっている。緑ヶ丘保育園の事故をはじめ、多くの人々の命が危険にさらされているという事実があっても、米軍関連の事故は一向に無くならない。すなわち、米軍関連の事故によって誰かの尊い命が失われるまでは、このような危険な状況と向き合いながら生活をしなくてはならないというのが沖縄の現状である。同じ日本であるにも関わらず、住民の安心・安全が保障されていない。果たして、これは平和だといえるだろうか。

この事件および、沖縄の基地問題は日本全体で考えなくてはならない問題である。決して他人事ではない。沖縄の現状を実際に自分の目で見、基地問題関係者の話を聞く、様々な角度からこの問題を捉え、考えていくことが必要である。

そのためには、私たちは以下の3点が重要な視点と考える。

- ・沖縄の子どもと米国の子ども命の重さは変わらない。命の軽視に対して声を上げる。
- ・常に子どもの未来を考える。子どもの未来を守る。
- ・米軍基地があることによって、様々な危険を感じながらの生活を強いられているという沖縄の現状を**自分事として捉える**。

<米軍ヘリ落下物事故及び保護者による署名活動の経過>

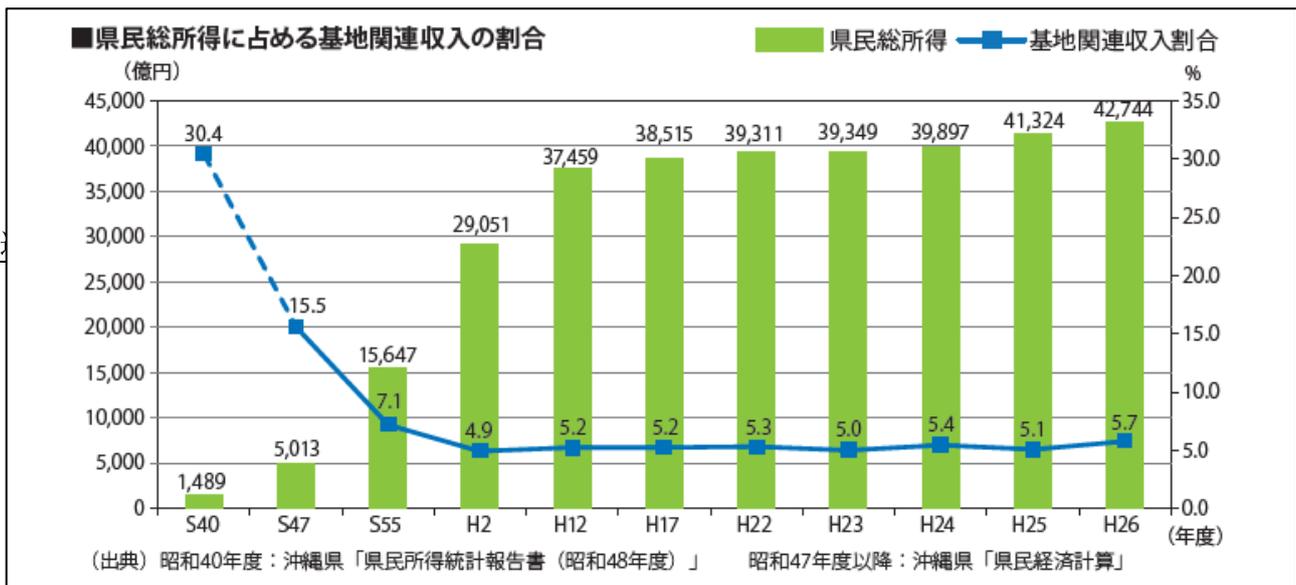
2017年	
12月7日	緑ヶ丘保育園の屋根に、米軍機からの落下物事故が起こる ・落下させたと思われるヘリの飛行画像、落下物が屋根に当たる音声あり ・保育園に隣接する野嵩1区公民館屋上にある県設置のカメラ及び集音測定器にて記録されている
12月9日	米軍側が「部品は米軍の物と認めるが、部品の数がそろっているため、落下については否定」と公表（その直後から、保育園に電話やメールで「自作自演」との誹謗中傷が始まる）
12月10日	『嘆願書』『署名』提出決議（全保護者、それぞれ嘆願書を書く）
12月12日	沖縄県知事、沖縄県議会「嘆願書提出」
12月13日	翁長沖縄県知事 非公式で来園
12月21日	警察による事故調査（事故発生から2週間後ようやく警察の捜査が入る）
12月27日	沖縄県知事「署名」提出
12月29日	宜野湾市役所前、緊急市民集会にて登壇及び署名活動
2018年	
2月13日	政府要請（内閣官房／防衛省／外務省／「陳情書（署名約12万筆）」提出）及び院内集会 外国特派員記者クラブにて記者会見
4月1日	チーム緑ヶ丘1207設立（緑ヶ丘保育園元保護者ら保育園関係者にて設立）
10月25日	松川宜野湾市長 保育園視察
10月29日	玉城沖縄県知事 保育園視察
11月14日	保育園へ騒音測定器設置（琉球大学 渡嘉敷准教授）
12月5日	宜野湾市議会前議員による保育園視察
12月7日	政府要請（内閣官房／防衛省／外務省／警察庁）及び院内集会
12月8日	東京上野駅前街頭演説
12月22日	「音楽&ことりフェス 2018～お空を飛ぶのは小鳥さんだけがいいな～」開催。市内外、県内外からのべ500人が来場
2019年	
2月	ことりツアーズ2019（糸満／那覇／名護／うるま）各地で開催
3月1日	沖縄防衛局職員来園（事故当時以来の来園）
3月3日	岐阜県平和委員会／愛知県平和委員会にて講演
6月16日	「何でお空から落ちてくるの？」池内福社会主催で講演（愛知県）
8月5日	広島国際反戦反核集会にて登壇
6月～8月	防衛局職員による保育園上空の米軍機の飛行状況及び子どもたちの様子の観察 （6～8月の3ヶ月間、2週に一度2時間程度、計7回実施）
9月26日	沖縄防衛局へ今後の対応についての面談

3-4. 沖縄の基地経済

本土復帰前の沖縄経済は、米軍施政権の下、高度経済成長における我が国の経済発展の過程から切り離されていたこともあり、基地依存型の経済構造が形成されていたため、経済全体に占める基地関連収入の割合が高い時期があった。

しかし、復帰後の沖縄は観光・産業を通じて着実に発展し、基地関連収入が県民総所得に占める割合は、1965年は30.4%だったのに対し、復帰直後の1972年は15.5%、2014年には5.7%と大幅に低下しており、基地関連収入が県経済へ与える影響は限定的になってきている。「沖縄経済は米軍基地がなければ成り立たない」と言われることもあるが、実際は、沖縄経済における基地関連収入の割合は大きくない。

そして、これらの米軍基地が返還され、跡地利用が進めば、県の経済に好影響を与えると考えられている。既に返還された駐留軍用地の跡地利用に伴う経済効果を試算すると、那覇新都心地区、小禄金城地区、桑江・北前地区の3地区合計では、返還前と比べて直接経済効果が約28倍、雇用者数が約72倍となっている。今後返還が予定されている駐留軍用地についても、跡地利用を進めることで、約18倍の直接経済効果及び誘発雇用人数が見込まれている。中でも、辺野古への移設に伴う基地建設で問題になっている普天間飛行場は返還によって約32倍の経済効果が得られると見込まれている。



北谷町にある「美浜タウンリゾート アメリカンビレッジ」

北谷町は沖縄の中部に位置し、北は嘉手納町、南は宜野湾市に面しており、戦前までは農村として栄えた。第二次世界大戦において米軍の沖縄本島上陸地点になった当時北谷村は、村全域が占領地となり、終戦とともに田畑は兵舎や飛行場へと変え、米軍による嘉手納飛行場として分村された。

町制に移行した後も、米軍基地の返還運動を進め、ハンビー飛行場及びメイ・モスカラー射撃訓練場の返還跡地利用、これらに続くキャンプ桑江北側部分の返還跡地利用、北谷フィッシャリーナ地区開発などにより西海岸地域には新しい街並みが形成された。

現在では西海岸地域において大型宿泊施設、物販施設等の商観光業施設の集積が進み、賑わいと活気のある町となっている。

実際に私たちもハンビー飛行場跡地に建設された美浜アメリカンビレッジを訪れ、その施設規模や観光者の数を体感した。建物などは米軍が使用していたものを使っているため、アメリカンな雰囲気が感じられる。基地返還後の跡地利用によって、町の経済だけでなく、町全体の雰囲気が活性化し得ることを、身を持って感じた。そして、米軍基地が沖縄の経済発展にとって、最大の妨げになっていると改めて学んだ。



那覇副都心地区

那覇新都心地区は、沖縄戦により米軍の占領を受けた地域であり、かつては農地帯だった。1950年ごろに米軍による再接収が始まり、米軍人および軍属の住宅基地が建設されていった。その後、1965年から1987年にかけて順次返還され、返還跡地は那覇市の新たな都市拠点づくりとして、行政機関、金融機関、博物館・美術館のほか、大規模商業施設や住宅も整備されていった。また、新町名選考委員会により、新都心のセンター地区の名前の公募が行われ、「おもろまち」が採用された。"おもろ"とは、願いや希望の意味があり、市民にとって21世紀に向けた個性と調和に満ちた街として形成されることを目標としている。現在、ゆいレール「おもろまち駅」は交通の拠点としてだけでなく、ショッピングセンターや映画館、飲食店などの商業施設も充実し、那覇市の活気あふれるエリアの一つとなっている。



3-5. 沖縄国際大学と普天間基地

普天間基地は、宜野湾市の真ん中に位置し、まわりに学校や住宅、病院がある。「世界一危険」と言われ、日米は1996年、県内の別の場所に移すことを条件に住民に返すことを決めたが、返還に向けた動きは進んでいないのが現状である。

宜野湾市の中央部と北部は、米軍基地(約6.375k㎡)となっており、市面積(約19.7k㎡)の約32.4%を占めている。(市面積および米軍施設の面積は平成25年3月末現在)

普天間飛行場は、太平洋戦争末期に米軍が沖縄本島への侵攻を開始した1945年4月、日本本土への爆撃機の拠点として建設されたのが始まりであり、沖縄での組織的戦闘が終了した6月ごろ完成したと言われている。

右写真の赤丸が「沖縄国際大学」であり、中央に広がるのが普天間基地である。



面積：4806千㎡、うち民有地4329千㎡（2014年3月末）

軍人・軍属：約3200人

常駐機：48機（2014年10月末現在）

MV-22 オスプレイ（48機） CH-53 スーパースタリオン（8機）など

沖縄国際大学訪問 前泊博盛教授による講義、Smilife（スマイライフ）との交流

私たちは、2019年11月1日に普天間基地のそばに位置する沖縄国際大学を訪問した。午前中は、前泊博盛教授（マエドマリヒロモリ、大学院地域産業研究科・経済学部地域環境政策学科教授）の案内で6階屋上から普天間基地の実態についてレクチャーを受けた。その際、ちょうどオスプレイが帰ってくる様子を見学することができたが、ものすごい爆音であったことが印象深い。



普天間基地（沖縄国際大学6階屋上から撮影）

その後教室に移動し、「日米安保と米軍基地～憲法、安保、地位協定、そして民主主義～」と題して特別講義を受講した。以下、この講義の要点をいくつか紹介する

・沖縄の地理的優位性

→日本、中国、東南アジアなど、20億人以上の巨大市場が4,5時間以内の圏内に収まる。

・ 普天間基地返還問題の現状

→返還されると言われているが、実際には改修や補強が行われている。さらに、沖縄北部の基地では返還された後に、弾薬が見つかるなど、返還後に使用されているのではないかという疑惑が上がった。

・ 基地経済

→基地関係者は4万5000~5万人いて、約2400億円の消費支出がある。これは沖縄経済の約5%に過ぎない。基地が返還された後の方が経済効果は爆発的に上がる。沖縄は、「最低賃金」「子どもの貧困」が47都道府県で最下位。

・ 辺野古基地強行の真相

→「1. 米軍の名を借りた自衛隊新基地建設」

「2. 普天間基地代替機能の欠落」

「3. 辺野古基地建設の困難さ」

軟弱地盤、活断層、莫大な建設費、航空法違反（高度制限違反）、環境破壊など

* 3. に関しては、P.41~の「辺野古新基地建設問題」の部分で詳しく説明

・ 核配備問題

→辺野古弾薬庫の建て直しが行われているが、ドローン禁止法によって現状が見えないようになっている。北海道と沖縄に核配備しているのでは？と話題にされたが、ロシアのデマだと片付けられた。実際はどうか？

・ 地位協定第2条

→地位協定第2条では、「アメリカは日本の主権下にある場所であればどこでも自由に、ここを基地にしたいといえば基地にできる権利を持っている。日本は提供する義務がある。」となっている。そのため、北方領土返還交渉の際に、北方領土に米軍基地を置かないと約束することができない。

・ 日米安全保障条約があるから日本が危ない

→中国はミサイルで原発を撃てば核はいらないと言っている。北朝鮮は有事の際は全弾攻撃を行うが、これを迎撃することは不可能。山口県と秋田県にイージス艦が配備された理由は、その延長線上にグアムとハワイがあるため。

最後に、前泊先生の案内で米軍ヘリ墜落モニュメントを見学。沖縄国際大学は米軍ヘリによる被害を受けている。2004年8月13日、沖縄国際大学1号館ビルに米海兵隊所属のCH-53D型ヘリが接触し、墜落、炎上した。ネットワーク切断などの被害はあったものの、職員数名の軽傷で人命は無事だった。また、本館ビル向かいの図書館は学生だけでなく、地域住民も利用する施設だった。



沖縄国際大学ヘリ墜落事故（2004年）の展示

午後からは、藤波潔教授（フジナミキヨシ、総合文化学部社会文化学科准教授）と県外からの修学旅行ガイドなどの活動を行っている「Smilife(スマイライフ)」サークルの学生（男子2名、女子1名）と交流を行った。沖縄に住む学生が基地についてどのように考えているのかを伺うことができた。



Smilife との意見交流の様子

Smilife（スマイライフ）の概要

Smilife は、沖縄国際大学総合文化学科に属する社会文化学科のみの生徒だけで構成されたサークル。沖縄国際大学で 2004 年に普天間基地所属の米軍機墜落事故があった時に、平和って何だろうかと考えた時に、笑って生きることなんじゃないかということで、スマイルとライフを掛け合わせたサークル名になっている。社会文化学科は他の学科に比べ、沖縄のことをより中心的に学ぶ学科になっている。その学んだことを社会還元しようという取り組みから、授業で学んだことをベースに県外の修学旅行生や、年に 2・3 回は大学生を受け入れて、基地問題、沖縄戦について話していく活動をしている。所属人数は 60 人位だが大体動ける人数は 20 人程度で、シフトのようにして、気軽に参加できるようになっている。活動日は月によってバラバラで、何もない月もあれば、修学旅行シーズンになると週に 2~3 回の月もある。何もない月は自分たちで学び合いをするために合宿を行うこともあり、どのようにガイドをしたら伝わるかを皆で共有している。今年は担当教諭である藤波潔先生からファシリテーションの仕方を学ぶ。また、緑が丘保育園に行き行って学びを深めたり、広島経済大学のゼミナールの学生と毎年交流もしたりしている。

Smilife の学生との意見交流から

「修学旅行生や大学生にいつも伝えていること、発信していることは何か」

私たちの交流は基地がなければ成立していないということをまず伝え、「それぞれの都道府県と沖縄との架け橋になってください」と伝えていると話していた。そして、実際に見たこと、聞いたこと、交流したことに対して、家に帰った後も関心を持ち続けてほしいとのこと。また、物事を考える際に、自分に都合の良い側面ばかりを考えるのではなく、多角的に自分の意見を持つようにしてほしいと伝えているという。

ある学生は、戦争経験者や米軍関係者のような様々な立場の人が意見を持っている中で、自分はどのようなスタンスで、どういう立場で基地問題と向き合うのかを常に意識してほしいと話していた。マスメディア、報道で見るものが全て事実というわけではなくて、現場の人やフィールドにいる人たちの声にしっかりと耳を傾けて、幅広い考えを考慮した上で、自分の意見を持ってほしいということを伝えているそうだ。

「伝わったなと実感できる場面」

中高生から「国際交流をはじめとした基地の良い面と、米軍機の事故や米兵によるレイプなどの基地の悪い面を天秤にかけたときに、私は命の方が重いと考えているから反対です」と意見が出て、「自分もそう思います」と他の生徒からも共感の声が聞こえたときに、「やって良かった」と実感すると話していた。

もう一人の学生は、基地の存在を考えた時に「苦しみを持つ人たちの苦しみを解き放つためには、問題が起きないことが一番」だと伝えるという。すると、生徒たちは自然と「意外と自分の周りにも苦しんでいる人がいるかもしれない、助けたい」という気持ちを持ってくれる。こういった問題は「沖縄だけでなくどの場所でも言えることだよ、何も変わらないよ」と伝えることで、自分の身近なところに落とし込んで考えてくれる場面も多いので伝えてよかったと感じると話していた。生徒が帰る時に、もうちょっとしゃべりたいとか、見送りの時にすごい手振ってくれたりしたときは、基地問題は重い話だけど、それを少しでもいい雰囲気ですわせたのではないかとという裏付けになると話していた。

「修学旅行生や大学生との交流で自分たちと意見が違うと思う場面」

とある大阪の中学校の生徒たちに、「基地をどうしたらよいか」と考えさせた際に、埋立地を作って、離れた土地を基地にするのが良いという意見が、全体の20~30%から出たという。大阪の先生方に話を聞くと、関西国際空港が埋め立てできているため、そういった意見が出てきたのではという見解だった。また、生徒と話をしたときに身近な沖縄の話（基地に身近な）を聞きたいと言われ、アルバイトや国際交流もできる一方で、米軍機の事故も多いことを伝えると、「自分の意見ちょっと変わるかも」、「もう少し考えます」のように基地賛成・反対の考えが揺らいでしまう生徒も多いという。そこで、基地があることに対してプラスのイメージを持たせようとしていると話をする、「意外と知らなかった」、「それって報道されていないのでは」という自分たちとのギャップに気づくことができ、私たち自身も改めて学ぶことがあったり、新しい視点に気づく場面があったりすると話していた。

「基地と隣り合わせの生活に対する感情」

ある学生は、「小学生の時、授業が中断するのは当たり前だった」と話していた。小学校の近くが米軍ヘリの飛行ルートになっており、人の顔が見えるほど低空飛行をしていたという。朝の会も止まるのが当たり前で、飛行機が上空を飛んでいることは当たり前だと感じていると話していた。小学生の時に学校交流のようなものがあり、北海道の先生が来たことがあったそうだ。その際、北海道の先生と休み時間に運動場で遊んでいたら、ヘリが何機も飛んできて、腰を抜かして驚いている先生の姿が印象に残っていると話していた。このように、基地があることや米軍ヘリが飛んでいることが当たり前の環境で、大学に入学前までは米軍機に対して「嫌な存在」という感覚はなかったという。時どき、騒音がうるさいと感じるが、基地自体は生まれた時から当たり前の存在であるため、特に考えることはなかったが、Smilifeに入って、基地が作られた経緯や沖縄の歴史を知り、「当たり前」の怖さを感じたという。また、米軍機による騒音やその他の被害があることが当たり前になってはいけないという担当顧問からの話もあり、改めて米軍基地のあ

り方について考えるきっかけになったという。こうした背景から、「米軍基地は無い方がよいのではないか」、「基地があることで迷惑している人も大勢いるのではないか」など、基地に関してさまざまな意見を持つようになったと話していた。

もう一人の学生は、これまで何気なく生活してきた中で、基地の存在について考えることはあまりなかったと話していた。大学に入学し、普天間基地をはじめとした土地の強制接收による基地建設の経過を学んでいく内に、米軍基地の理不尽さを実感したという。しかし、現状として沖縄にある基地で働いている人や、基地周辺でアメリカ軍の方を相手に商売を展開している人もいるため、踏み込んだ意見として基地はあった方がよいのではないかとこの考えも持っているとのことだった。さらにもう一人の学生は、いつしか基地の存在は、私たちにとって当たり前のもものになっていて、改めて基地について学ぶという機会ほとんどないような状態だと話していた。そのため、いざなにかしらの問題が起こったとしても見向きもできないような人たちも多くいるという。大学に入り、一つひとつの歴史的背景や社会的背景を学んでいくと、基地の間違った解釈・理解にも気づくようになり、研究や調査を通してさらに探求していくようになった。しかし、大抵の人がこのように「基地について考える」「基地について学ぶ」という段階まで行き着かないほどに、基地が“日常的な存在”になっていることが一番の問題だと感じているという。

「基地があつてよかったこと」

サッカーを続けてきた学生は、沖縄は孤島のため他府県との試合が難しいことから、基地内でアメリカの人や、ハーフの人とサッカーの試合ができることをメリットとして挙げていた。基地内に入る場合、書類申請をして基地内に入ることとなるが、これに対して反対する親御さんはいなかったという。それくらい現地の人たちにとって基地は身近な存在ということである。ただ、飛行機や武器を展示したりするイベントだと、難色を示す親御さんもいるとのことだった。

また、基地の近くでアルバイトをしている学生は、アメリカに留学しているくらい、日常的に英語を使う機会が多いと話していた。米軍基地は軍事施設のイメージが強く根付いているが、基地内には米軍関係者の子どもが通う大学があり、基地外からの留学も可能だという。基地内はアメリカ軍が統治しているため、許可証がないと入れないことから、留学という形になる。もし、基地の中に一般の方が入るとなると書類申請をしなければ入れない。アメリカ国籍を持っている方、基地内で働いている関係者は専用のパスを持っており、このような関係者のエスコート等がなければ入ることはできない。また、書類申請を行い一日限定のパスを作成しなければならず、こうした作業に20分程度要し、そこで初めて、基地内に立ち入ることができるという。また、基地内には小・中・高などの教育機関だけでなく、映画館、ボーリング場などの娯楽施設も多数あり、基地の中が一つの街のようになっていることが理解できた。このようなお店は、すべてアメリカ使用になっていて、アメリカブランドの物などは価格が日本の物よりも安くなっているとのことだった。また、親戚の中に、基地内で働いている人がいることは珍しいことではなく、おじいちゃん・おばあちゃん世代は、軍の仕事をしていた人が多いため、英語を喋れる人も多くいることが分かった。

「自分の実生活の中で、基地があることのデメリットと迷惑だと感じること」

一人の学生は、「まず車の渋滞が迷惑だと感じる。米軍のトラックが横転して渋滞になったこともあった。ただ、自分の中では大きな弊害とは感じていない」と話していた。もう一人の学生は、「マップで見ると、直線距離では車で5分のアルバイト先に、基地があるため遠回りをしなければならず、結果15分もかかってしまう」という基地の立地的な弊害を挙げていた。また、「基地があるため店舗付近に駐車場が作れず、歩いて20分の場所に駐車場があることがとても不便」と話していた。基地を飛び越えていけたらどれほど楽かと考えるという。

宜野湾市に住む方は、「地位協定上は夜の9時までしかヘリを飛ばせないはずなのに11時くらいまで平気で飛んでいるときもある」と話していた。中には、自分の家の上空で旋回する日もあるため、テレビの画面が止まることがあるという。加えて深刻な問題は、上空を飛んでいる米軍機そのものや、米軍機の部品が落ちてくるという事故が月に平均2.5回あることだと話していた。「もし、その2.5回の内、1回が自分の家だったらどうしよう」と米軍機の音を聞くたびに考えながら生活しているという。また、宜野湾市の経済規模からすると、中央部に消防署の本部があれば1つで済むのに、基地沿いを遠回りして行かなければならないため、消防署本部の他に3か所支署を作らなければならず、余計に税金がかかっているという現状もある。これは、基地が無ければかからない税金であり、水道下水も同じように余計な税金を負担しているというのが実態である。こうした背景から、命の危険はもちろんだが、生活していて不便さを感じる場面も多いと話していた。

最後に、基地に関しては、同じ沖縄でも、住んでいる地域によって捉え方が大きく異なっていると言っていた。基地の近くに住んでいる人は、周りの音が大きいため、必然的に声が大きくなったり、基地に対してものすごい嫌悪感を持っている人もいる。住む場所によっても基地の影響や抱いている感情が異なることは留意しなければならない。

これらの交流を通し、沖縄の基地に対して知らなかったことを学ぶことができた。特に、沖縄に住み続けている方々にとって基地は身近なものであり、生活の一部になっているように感じた。私たちが違和感を抱くようなヘリの音も当たり前の環境であった。また、基地に対しての嫌悪を感じさせないようなエピソードをお話しいただいたが、一人の学生が発言した「命より大切なものはない」ということが印象的であった。どんなに日常的な不便さを感じていなくても、アメリカ人との関りを持たせたとしても、米軍ヘリの事故や米軍兵による事件は後を絶たない。これによって日常生活が不安になったり、命の危険を感じたりするようなことがあっては、平和とは言えない。私たちにとって、貴重な交流の時間であり、沖縄に住む方々の意見を聞き、感じたこと・学んだことをしっかりと受け止め、考えていきたい。



3-6. 辺野古新基地建設問題

戦後70年を過ぎても日本の国土面積約0.6%の沖縄県に、約70.6%もの米軍専用施設が存在し続け、状況が改善されない中で、今後100年、200年使われていくであろう辺野古新基地ができることは、沖縄県に対し、過重な基地負担や基地負担の格差を固定化するものである。沖縄が自ら基地を提供したことは一度もなく、戦後の米軍占領下の集落強制接収のような、住民の意志とは反する形で基地建設が行われてきた。これらの背景を踏まえれば、普天間飛行場の移設は「辺野古が唯一の解決策」として沖縄が新たに基地を負担させられることの理不尽さが目に見えてわかる。

2019年11月2日→



大浦湾一帯は、絶滅危惧種262種を含む5,300種以上の生物が確認された生物多様性の豊かな海である。湾内には大規模なアオサング群落や海草藻場が広く分布しており、ジュゴンやウミガメなど多くの生物が生息するなど、沖縄島においても特に自然環境が優れている地域である。そのような海域において、現在、埋め立て工事が進められており、工事の着手以降、事業実施区域周辺に生息していたジュゴンが確認されなくなっている等、ボーリング調査や多数の船舶の航行など既に実施された工事による環境影響が懸念される状況にある。

辺野古新基地建設に関する3つの争点

1. 軟弱地盤、自然環境への影響

- (1) 軟弱地盤が水面下90メートル付近まで確認されているのに対し、水面下70メートル程度までしか地盤改良が計画されていない。
- (2) 大浦湾の狭い海域内で90隻を超える多数の作業船が衝突防止や錨鎖のため、船舶間の距離を一定程度確保しなければならないことから、広範囲にわたり、ジュゴンやウミガメ、魚類等の移動阻害や逃避などへの影響を及ぼすことが懸念される。
- (3) 地盤改良工事の計画によると、海底へ敷砂を投入後、砂杭を打ち込む際、最も深いところでは水深30メートルを超える地点で行われる予定である。そのような深い海底においては、施工箇所を汚濁防止膜等で覆ったとしても、海底から巻き上げられた土砂による水の濁りの拡散が懸念される。

2. 莫大な建設費(2兆5500万円)

辺野古新基地の建設費は約2.5兆円と言われている。しかし、その莫大な金額をかけて建設される基地面積は普天間基地の約3分の1程度の規模であり、米軍の戦闘機500機を駐機できないという点で、普天間の代替基地としては不十分だという指摘もある。

なぜ「世界一危険」と言われる普天間基地を一定期間放置してまで、米軍が使用するか確認のない基地を新たに建設する必要があるのか。また、土砂投入に踏み切った背景に自衛隊新基地としての利用も想定されているという指摘もある。

3. 県民投票の反映

辺野古米軍基地建設のための埋立ての賛否を問う県民投票条例（2018年沖縄県条例第62号）第10条第1項の規定により、2019年2月24日に実施された県民投票の結果は以下の通りである。

	男	女	計
投票資格者の総数 (投票資格者の総数の4分の1の数)	562,042人	591,558人	1,153,600人 (288,400)
投票者の数	281,205人	324,191人	605,396人
棄権者の数	280,837人	267,367人	548,204人
投票率	50.03%	54.80%	52.48%
賛成の投票			114,933票
反対の投票			434,273票
どちらでもない			52,682票
有効投票			601,888票
無効投票			3,497票
投票の総数			605,385票
不受理等の数			11票
投票者の数			605,396人

基地建設反対派 約72%

このように、沖縄県民の約7割が辺野古への新基地建設に対して、反対意志を示している。投票結果から民意は明らかになっているにも関わらず、2018年12月14日に開始された土砂の投入および、新基地の建設が中断される気配は全くない。民主主義国家である日本において、選挙で示された民意が反映されないのでは、人権問題に発展する。これらは、戦争を経て本土に復帰し、米軍基地の過重負担を背負い続けてきた沖縄県が、米軍だけでなく国内に対しても民意が反映されていないことを意味する。



これら、民意が反映されていない動きに対し、長年反対運動を行っている方々も大勢いる。私たちが辺野古を訪れた 2019 年 11 月 2 日時点で、新基地反対の座り込み運動は「5676 日」にも及んでいた。



私たちが辺野古新基地建設現場の前を歩いて通り、反対運動をしている方にお話を聞くことができた。お話の中からは、朝の 4・5 時からピラ配りを行っていた時期もあったり、ストーブを焚いて座り込みを行ったりと、どんな日でも欠かさずに活動していることが印象的であった。体を壊しても、また反対運動を行っているとのことだったため、その行動力にも驚かされた。辺野古の海だけではなく、恩原遺跡など、周囲には多くの文化財があり、これらを守るためにも座り込みをしている。もし、新基地が建設されれば、名護市の貴重な文化財はほとんど消滅してしまうとのことだった。

私たちが辺野古を訪れたのは土曜日であったため、反対運動をしている方は少なかったが、それでも 40 名近い人はいたように感じた。

名護市と宜野座村にまたがる海兵隊基地「キャンプ・シュワブ」は、100 デシベルを超える爆発音や航空機の騒音被害が生じている現状がある。100 デシベルは、「電車が通る時のガードレール下」と表現される。廃弾処理や実弾射撃訓練、オスプレイの離着陸・旋回訓練などが日常的に行われており、住民は不安を抱えながらの生活を強いられている。爆発音や射撃音に関しては、最大値で 100 デシベル以上記録される日もあり、さらに、80 デシベル（地下鉄・電車の車内）以上を 1 日で 100 回以上記録される日があるなど、騒音被害が日常茶飯事であることが伺える。この上で、辺野古に新基地が建設されると、普天間基地で行われていたオスプレイの訓練などが増加し、さらに騒音被害が激化していくことが予想されている。沖縄に住む方の話によれば、騒音被害が大きい地域の人ほど、耳が遠かったり、声が大きい人が多いという。日常生活にまで影響を与えている騒音被害があるのが、名護市の現状である。



4. 北海道における米軍基地

2節で示しているように、北海道における米軍専用施設面積は 4,274 千㎡で、全体の 1.62%となっている。また、北海道に置かれている在日米軍施設・区域は下記の通りである。括弧書きの施設・区域名は日米地位協定第 2 条第 4 項(b) に基づき米軍が一定の期間に限って使用している施設・区域を示しており、北海道においては在日米軍施設の割合が高いことがわかる。

北海道の在日米軍施設・区域（共同施設を含む）別一覧 2019 年 3 月 31 日現在

施設・区域名	用途	所在地	面積(千㎡)
キャンプ千歳	通信	千歳市	4,274
(東千歳駐屯地)	演習場	千歳市	81
(北海道・千歳演習場)	演習場	恵庭市、千歳市、札幌市、北広島市	92,288
(千歳飛行場)	飛行場	千歳市、苫小牧市、幌泉郡えりも町	2,584
(別海矢白大演習場)	演習場	野付郡別海町、厚岸郡厚岸町 厚岸郡浜中町	168,178
(釧路駐屯地)	兵舎	釧路郡釧路町	26
(鹿追駐屯地)	演習場	河東郡鹿追町	59
(上富良野駐屯地)	演習場	空知郡上富良野町、富良野市 空知郡中富良野町	34,688
(札幌駐屯地)	演習場	札幌市	8
(鹿追然別中演習場)	演習場	河東郡鹿追町	32,832
(帯広駐屯地)	演習場	帯広市	757
(旭川近文台演習場)	演習場	旭川市	1,416
(丘珠駐屯地)	その他	札幌市	2
(名寄演習場)	演習場	名寄市	1,734
(滝川演習場)	演習場	滝川市、樺戸郡新十津川町	1,367
(美幌訓練場)	演習場	網走郡美幌町	2,269
(倶知安高嶺演習場)	演習場	虻田郡倶知安町	928
(遠軽演習場)	演習場	紋別郡遠軽町	1,082

長沼ナイキ訴訟（1982 年 9 月 9 日最高裁判所）

防衛省は北海道夕張市長沼町に航空自衛隊の「ナイキ・ハーキュリーズ型地对空ミサイルの発射基地」を設置することとし、1969 年 7 月 7 日に公益上の理由があるとして、農林大臣が森林法 26 条 2 項に基づき国有保安林の指定の解除を行った。これに対して、反対住民が基地に公益性はなく、「自衛隊は違憲であり、保安林解除は違法である」と主張し、処分の取消を求めて行政訴訟を起こした。

第 1 審札幌地裁（1973 年 9 月 7 日判決）は、原告の訴えの利益を肯定し、憲法判断回避の準則の適用を否定して、自衛隊の合憲性について判断し、違憲論を前提にして、

本件の処分が、森林法 26 条 2 項の「公益上の理由」を欠く違法なものと判断して、原告の請求を認容した。なお、第 2 審札幌高裁（1976 年 8 月 5 日判決）、上告審最高裁（1982 年 9 月 9 日判決）はともに原告の訴えの利益を否定して、訴えを却下した。

「長沼ナイキ訴訟」は自衛隊の違憲性を問うという点で貴重な判例である。私たちは、長沼ナイキ訴訟をはじめとした事実を通して、北海道と米軍基地の関わりについて考えていかなければならない。

5. まとめ

沖縄にとって米軍基地がどれだけの障害になっているのかを踏まえ、新基地建設の中止と基地返還に向けた取り組みを進めていくべきだと考える。その中で、日米地位協定及び日米安全保障条約の見直しについても考えていく必要がある。普天間基地をはじめとした米軍基地そのものが危険なのではなく、米軍機が飛び交う環境が危険なのであると感じた。いつ空から何かが落ちてくるかもしれないという恐怖感を抱きながら生活することは、安心安全な生活とは到底言えない。これらを踏まえ、移設先を問題視する以前に、米軍機を自由に飛ばせない状況を作っていかなければならない。基地問題は様々な困難を伴うからこそ、先送りにせず、日本国民の一人として向き合っていかなければならない問題である。辺野古基地建設に関する県民投票では民意は「反対」であった。しかし、この意に反して辺野古基地建設が始まっている。民主主義すら保たれていないことが沖縄の基地問題からは痛烈に意識させられる。日本の主権さえ脅かされる日米安保条約や日米地位協定は沖縄だけの問題ではない。日本人として民主主義とは何なのか、もう一度考え直さなければいけないと考えた。誰かの犠牲の上に成り立つ平和は本当の平和とは言えないのではないだろうか。



辺野古の海

参照文献・資料等

沖縄タイムズ社編集局(2017)『これってホント？誤解だらけの沖縄基地』高文研.

「しんぶん赤旗」政治部、安保・外交班(2019)

『検証 日米地位協定 主権を取り戻すために』日本共産党中央委員会出版局.

沖縄から伝えたい。米軍基地の話。Q & A Book 沖縄県

<https://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/kichitai/tyosa/qanda.html>

2019年11月26日閲覧

宜野湾市ホームページ

www.city.ginowan.okinawa.jp/sisei/base/01/aboutfutenmaairstation.html

2019年11月26日閲覧

北谷町公式ホームページ

<https://www.chatan.jp/seikatsuguide/beigunkichi/chatanbeigun/chatanchotokichi.html>

2019年11月26日閲覧

名護市役所ホームページ

www.city.nago.okinawa.jp/kurashi/2018071900226/

2020年1月31日閲覧

辺野古米軍基地建設のための埋立ての賛否を問う県民投票 沖縄県

<https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/chijiko/henoko/kikaku/kenmintouhyou.html>

2019年11月26日閲覧

防衛省・自衛隊

https://www.mod.go.jp/j/approach/zaibeigun/us_sisetsu/index.html

2020年1月31日閲覧

普天間パプテスト協会附属緑ヶ丘保育園 ホームページ

<http://www.futenmabap-church.com/nursery/midorigaoka.html>

2019年11月26日閲覧

神谷武宏園長 講演「なんでおそらからおちてくるの？」

2019年11月9(土) 北海道クリスチャンセンター

第3章 学校での授業案

これまで学んできたことから、「どのように学校教育に生かすか」視点で2つの授業案を作成しました。1つは「戦争」に焦点を当てたもの、もう1つは「基地問題」に焦点を当てたものを作成しました。戦争に関しては、特に中高生と同年代である「ひめゆり学徒隊」を中心に、戦争に悲惨さと、生活環境を証言文をもとに展開しています。基地問題に関しては、沖縄に住む方々の声を取り入れ、不平等な日米安保条約や日米地位協定を通して、沖縄は今なお戦争の影響を多大に受けていることを伝えられるように展開しています。

1. 「戦争」に焦点を当てた指導案

本時の指導計画				
	学習内容	学習活動	時間	指導上の留意点
導 入	・ひめゆりの学生	写真①を提示し、「この人たちどんな人か知っている?」「何歳くらいに見える?」と発問する。 →ひめゆり学徒隊は、戦争が始まる前は普通に学校生活を送っていたことを理解する。	5分	・同年代であることを意識させる。
展 開	・ひめゆり学徒隊と戦争	・写真②を提示し、「写真①となにが変わったかな?」と発問する。 →制服の移り代わりから、戦争の影響を考える。 ・証言文①を読ませる。 →楽しみにしていた英語は戦況が悪化すると禁止されたことを伝え、戦争の影響が学校生活に入り込んできたことを理解させる。	10分	
	・動員命令と学徒隊	・彼女たちが戦争に突然動員されたこと、戦場での仕事内容を説明する。写真③を提示する。 ・証言文②を読ませる。 「みんなが、もし彼女たちだったら同じことできる?」と発問する。 →看護訓練をしていない学生たちが、戦争に参加していくことを理解させる。	10分	
	・解散命令と集団自決	・6月23日の解散命令について説明する。 →牛島中将が自決し、解散命令が出され多くの学徒隊が亡くなったと説明する。 証言分③、④を読ませ、「この人たちはどんな気持ちで集団自決したんだろう」と発問する。 →集団自決について説明し、これにより民間人も犠牲が多かったと説明する。	15分	
整 理	・平和祈念公園	・写真④を提示し、平和祈念公園について触れる。 ・写真⑤を提示し、「沖縄県以外で、犠牲が多かった都道府県はどこ?(三択)」と発問する。 →北海道の兵隊の犠牲が多かったと説明する。 ・写真⑥を提示し、「ここに英語で刻まれている人はどんな人?」と発問する。 →沖縄戦で亡くなった米兵で、世界平和の意を込めてここに名前刻まれていることを説明し、命の平等さに気づかせる。	10分	

【指導目標】

- ・ 民間人の犠牲が多かった沖縄戦を、生徒と近い年齢であったひめゆり学徒隊に焦点を当て、沖縄戦について理解する。
- ・ ひめゆり学徒隊がどのような感情を抱きながら生活していたのかを実感する。
- ・ 北海道と沖縄戦の関係を知り、平和祈念公園から命の平等さを考える。

【指導細案】

〈ひめゆりの学生〉

発問①「何歳くらいに見える？」

「この人たちは誰か知ってる？」

- ・ ひめゆり学徒隊は沖縄県師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の2校の生徒たちの通称。
 - ・ 生徒たちと同じ年齢であることを実感させる。
 - ・ クラブ活動（弓道、バスケ、茶道、お琴）などがあった。
- 戦争に動員される前はみんなと同じ学生であったことを強調する。



(写真①)

〈ひめゆり学徒隊と戦争〉

制服の移り変わり



写真②



発問②「二つの写真は何が変わったかな？」

→当初は白襟のセーラー服であったが、戦況が悪化していく中でいつ何時でも動きやすくするようにモンペになった。

- ・ 教科の変更

証言文①『ひめゆり学徒隊の引率教師たち「長坂先生の英語が待ち遠しかった』』

「2年生になって、新任の若い先生（長坂治雄先生）に変わった。最初の授業で先生は『ウィンターズイズオーバー。イツ、スプリングナウ。』と大きな声で勢いよく教室に入ってこられた。みんな目を白黒させびっくりした。そして先生は教壇に立たれて、やおら自己紹介しておられた。それから英語の時間が待ち遠しいほど好きになった。ところが太平洋戦争が始まり、3年生になった頃英語は機職と選択教科になり、敵国後と排斥され、だんだん興味がなくなった。その後先生は招集されていった。」

→戦争の影響を受けて英語の科目が消えていく。竹やり訓練や畑仕事に。生徒の学校生活が戦争に影響されてきた。

〈動員命令〉

3月23日に米兵からの上陸に向けた猛攻撃が始まった日の夜に、陸軍を指揮していた牛島満中将から動員命令がでる。家族と会えなかった人、家族の反対を押し切って戦争に参加した人もいた。

仕事内容



(写真③)

・主な仕事内容は、炊事・壕掘り・衛生材料や食事や水の運搬・患者の看護や救護・手術の助手・食料調達・死体の埋葬・伝令など。

発問③「もしみんなが同じ立場だったらできる？」

戦線が悪化に伴い、負傷兵の手術が頻繁に行われたが、麻酔なしの手術であり、そのほとんどが足や腕の切断であった。手術の助手として手術台を照らすためにろうそくを持ったり、痛みに耐えきれずに暴れだす患者を押さえつけることもあった。手術後に切断された足や腕を砲弾の飛び交う中、捨てにいかされることや、亡くなった兵士の埋葬のために砲弾の飛び交う中、外に行くこともあった。

証言文②『ひめゆり平和祈念資料館「十分な麻酔をしないで手足切断」』

『私たちの仕事は、手術で切断する手足を持つ役目です。麻酔はエーテルを嗅がせるくらいで、切断される患者の手を握り、押さえつけて、「頑張って下さい」と励ますのです。』

- 「麻酔をしないで手術なんてできるかな?」、「みんなならできる?」と発問する。
- 看護訓練も受けていない、みんなと同じ年齢の子たちが戦争にこうやって参加していった。

〈解散命令と集団自決〉

6月23日に牛島中将から解散命令が出たことにより、壕から出され、米兵の攻撃により亡くなる学徒隊が多かった。

さらに、「捕虜になったらひどい目にあわされる」、「捕虜になるくらいなら自決しろ」と教えられていたため、自決する人も多くいた。

証言文③『ひめゆり平和祈念資料館「明日は本当に死ぬ日だな」』

『早朝、久田祥子さんと村田俊子さんが海岸の方に水を汲みに行って帰って来て、「先生、もうアメリカが来ていますよ」と仲宗根政善に言ったのです。先生は、「そうか」と考えているようでした。12名で手榴弾を3つ持っていたんです。それで自

決しようと話し合ったんです。大変静かな晩でした。もう戦争は終わったよと言う兵隊もいました。ほんとうにもう弾の音も聞こえなかったんです。「ああ、もう戦争も済んだな。捕虜になるよりは死んだほうがいい。明日は本当に死ぬ日だ」と心の中で決めていました。』

→解散命令後に手榴弾で自決した学生も多数いた。

発問④「彼女たちはどんな思いで、自決をしようとしたのかな。」「みんなは『自決をしろ』と言われたらできる？」

証言文④『ひめゆり学徒隊の引率教師たち』

『「皆自決しよう、自決だ。自決だ。」と言って、仲宗根先生の方にかたまって腕を組み、今にも自決しようという状態になったわけです。その時、私は、「先生、死にたくない。お母さんにもう一度会ってから死にたい」と、本当にもう泣かんばかりに言ったのです。そしたら先生は、「弾を捨てなさい！」と怒鳴ったんです。「弾を捨てる！」と、つづけておっしゃったので、上級生も先生の命令に従って手榴弾を捨てました。間もなくアメリカ兵の方に行って捕虜になったのです。』

→自決をしようとしたけど、しないで生き残った学生もいた。

→実際には捕虜になっても、ひどいことはされなかった。

〈平和祈念公園〉

6月23日が沖縄慰霊の日となり、その日は毎年沖縄県民が集まる。沖縄県民にとって重要な日。平和の礎には犠牲となった人々の名前が県ごとに刻まれている。



(写真④) →

発問⑤「沖縄県以外で、亡くなった兵士が多いのどこの都道府県だと思う？」

* 三択→①愛知県 ②東京都 ③北海道 答え) ③北海道

→沖縄戦では沖縄県の人々や、兵隊だけが亡くなっていったのではなく、北海道から沖縄に行き、亡くなった人も多い。



(写真⑤)



(写真⑥)

→写真⑤、⑥のように、日本人の戦没者の名前だけではなく、戦没者の名前が英語で刻まれている。

発問⑥「この英語で名前を刻まれている戦没者の人々はどんな人？」

→米兵の名前。世界平和の意をこめて、沖縄戦で亡くなった米兵の名前を刻んでいる。

日本人もアメリカ人も同じ命の重みという表れである。

→戦争は人が人の命を奪ってしまう。決して戦地にいる兵隊の犠牲だけではない。戦争はそこに住む人々の、命や生活、心までも奪ってしまう。

〈 メ モ 〉

2. 「基地問題」に焦点を当てた指導案

本時の指導計画				
	学習内容	学習活動	時間	指導上の留意点
導入	・沖縄ってどんなところ？	・「沖縄について知っていることは何？」と発問する（食べ物、人物、文化、気候、基地、オスプレイなど）。 ・沖縄の華やかさと暗さ両面を理解させる。 ・普天間基地の概要を説明する。	7分	・写真提示 ・オスプレイの音を聞かせる
展開	・沖縄戦の概要	・沖縄戦の特徴を説明する（地上戦、捨て石作戦、民間人）。 ・ひめゆり学徒隊の置かれた状況を実感させる。（年齢、仕事、犠牲）	10分	・生徒と同じ年代であることを意識させる
	・戦争の影響 ・現地に住んでいる人は基地をどう思っている？	・アメリカによる沖縄占領を説明し、「なぜ沖縄に基地があるの？」と発問する。 →普天間基地は戦時中に占領された。 →戦争の影響が今も続いている。 ・「基地があることのメリット、デメリットを考えよう」と発問する。 →沖縄国際大 Smilife の方々の意見を紹介する。 →沖縄国際大、緑が丘保育園の事故について	20分	・グループワーク
開	・江別市に基地があったら？	「もし、江別市に基地を作れと言われたら？」と発問する。 →安保条約・地位協定について説明する。 ・辺野古基地の概要を説明する。	10分	・それぞれを重ねる
	・辺野古新基地問題	・県民は「辺野古新基地建設をどう思っている？」と発問する。 →反対活動をしている人がいることを紹介する。		・県民の72%が反対していることを示す
整理	・まとめ	・沖縄では基地問題など戦争の影響が色濃く残っていることを振り返る。 ・沖縄が過度な基地負担をしている中で、辺野古新基地建設が進む問題点を問う。	3分	

【指導目標】

- ・ 沖縄戦の特徴である民間人の犠牲が多いことについて、特に生徒と同年代である「ひめゆり学徒隊」を理解し、戦争の悲惨さを考える。
- ・ 沖縄の米軍基地問題の現状を理解するとともに、現地の人々の意見を取り上げ、基地があることでのメリット・デメリットを考える。また、基地問題は沖縄だけの問題ではなく、日本全体の問題であることを認識する。

【指導細案】

〈沖縄ってどんなところ？〉

発問①「沖縄について知っていることを言ってみよう or 書いてみよう」

→生徒の意見を引き出し、写真を提示して説明する。

華やかさ



シーサー



ジンベイザメ



きれいな海



ハイビスカス

暗さ



基地



辺野古



侵入禁止の看板



沖縄戦

→オスプレイの音声を聞かせる。普天間基地について説明をする。

〈沖縄戦の概要〉

沖縄戦の特徴を挙げていく。

- ・ 激しい地上戦：民間人も巻き込まれ
- ・ 捨て石作戦：一日でも長く戦うための持久戦で、勝とうと思っていなかった。
- ・ 民間人の犠牲→住民が避難していた南部に、軍が逃げ込み、戦争が続いた。

特に、「ひめゆり学徒隊」自分たちと同じ年代の学生たちも戦争に巻き込まれた。



主な仕事内容は、炊事・壕掘り・衛生材料や食事や水の運搬・患者の看護や救護・手術の助手・食料調達・死体の埋葬・伝令など。戦線が悪化に伴い、負傷兵の手術が頻繁に行われたが、麻酔なしの手術であり、そのほとんどが足や腕の切断であった。手術の助手として手術台を照らすためにろうそくを持ったり、痛みを耐えきれず

暴れだす患者を押さえついたりすることもあった。砲弾の飛び交う中、手術後に切断された足や腕を捨てに、亡くなった兵士の埋葬のために外に出ることもあった。

発問②「もし、あなたが同じ立場だったらできる？」

〈戦争の影響〉

戦後、沖縄はアメリカの占領下に置かれ、戦争の影響を多大に受けた。1972年5月15日に沖縄は日本に返還されたが、現在も米軍基地があり、戦争の影響を受け続けている。

発問③「なぜ沖縄に基地があるの？」

→沖縄戦後に米軍に占領されたから。米軍の支配下に置かれたから。普天間基地は戦時中にアメリカ軍によって基地にされたから。

発問④「沖縄の米軍基地は、沖縄本土の何%あると思う？(右図提示)」

日本全体のアメリカ軍専用施設の約70%、沖縄本島の約15%を占めている。沖縄は日本の国土の0.6%しかない、そのわずかな地域に70%の米軍施設がある。



〈現地に住んでいる人は基地をどう思っている？〉

発問⑤「基地があることのメリット・デメリットを考えてみよう」

(沖縄国際大学 Smilife の方々の意見)

メリット

- ・アメリカ人が多くいるので、アルバイトをしていると英語の練習になる。また、基地内の大学に留学することができる。
- ・基地内の方々とサッカー交流をすることができ、レベルの高い練習ができる。
- ・アメリカのファッションブランドが安く手に入る

デメリット

- ・渋滞が多くなる。
- ・基地を横切ることができないため、基地沿いを通らなくてはならず時間がかかる。
- ・家の上を航空機が旋回すると、テレビが固まる。また、航空機関連の事故が起きた時に子どもを抱えて逃げなくてはならないのかと、いつも不安になる。

(航空機関連の事故、米兵による犯罪事件の発生)

2004年 沖縄国際大学構内(宜野湾市)に米軍ヘリコプターが墜落する

2017年 緑ヶ丘保育園の屋根に、米軍ヘリの部品が落下した

2017年 普天間第二小学校の校庭に、米軍ヘリの窓が落下した

→これまでに起きた事故の中には、人命が失われたケースもあるため、安全に生活できている(平和)とは言えないのではないかと

→同じ日本なのに、北海道と沖縄で安全面にこれほどの違いがあるのは当たり前?

〈江別市に基地があったら?〉

発問⑥「もし江別市に基地があったらどのくらいの大きさになると思う?」

→江別市と普天間基地の地図を重ね合わせ、重なった部分に住んでいる人を確認し、「ここを基地にするから、移動してください。って言われたらどうする?」と問う。

江別市



普天間基地



発問⑦「江別市に基地なんてできないって思ってない？可能性はゼロじゃないんだよ？」

→江別市に基地ができる可能性があるのは、日米地位協定の第2条により、米軍は日本国内のどこでも好きな場所に基地を置くことができるとされているから。

また、安保条約6条に基づき、日本の安全を守るために、施設・区域の使用を許可するとされている。

米軍に有利すぎる日米地位協定

- ・ 日本国内のどこでも好きな場所に基地を置くことができる（第2条）
- ・ 事故や騒音など日本の法令に反した被害を起こしても、米側は警察・政府の立ち入りを制限できる（第3条）
- ・ 米軍関係者は違反をしても免停なし（第10～13条）
- ・ 米軍の犯罪が「公務中」の場合、裁判の優先権は米軍側にある（第17条）
→日本側に裁判の優先権がある「公務外」の場合でも、8割超が不起訴処分
- ・ 米軍側に100%責任がある事故でも、日本側が4分の1もの負担を強いられる（第18条）

→沖縄では、最高法規である憲法の上に、日米地位協定がある。

同じ日本の問題として、協定改正に声をあげていかなければいけない。

〈辺野古新基地問題〉

発問⑧「沖縄の民意は賛成 or 反対？ その割合はどれくらいだろう？」

辺野古埋め立てへの「反対」は72.15%、「賛成」は19.1%、「どちらでもない」が8.75%。投票率は52.48%。



しかし、2018年12月に開始された、辺野古への土砂投入が中止される気配はない辺野古の新基地建設に対して、反対活動を行っている人たちがいる。

〈まとめ〉

沖縄の華やかな面だけではなく、沖縄の実態に関心を持ってもらいたい。沖縄の声に、耳をかたむけていくことが必要であることを伝え、基地問題の背景には戦争の影響があり、沖縄では戦争の影響が今も続いていることを強調する。

第4章 個人のまとめ

実際に沖縄を訪れ、様々な方々と関わりの中で学んだことを、今度は「学校教育にどのように生かすか」という視点で1年間の活動を通してきました。一人ひとり感じたことや学んだことは違いますが、目指してきたものは共通しています。最後に、1年間の活動を通して何を感じ、何を学んだのかを個人でまとめました。

安保萌花（人文学部人間科学科3年）

沖縄に行く前は、「沖縄に行ける！」という嬉しい気持ちが率先していた。プロジェクト審査会が終わり、無事合格した後は、事前に沖縄戦や基地問題の資料を読みこみ、メンバーの中で討論を重ねながら沖縄について学んでいた。しかし実際に沖縄に行ってみて、沖縄戦の資料館の見学や、沖縄国際大学での前泊先生の講義、smilife との交流、辺野古や普天間基地での反対運動をしている人たちとの交流から、私たちが事前に学んだことは沖縄の問題の表面的な理解でしかなかったと痛感した。

沖縄に着き、まず初めに感じたのはそこら中に金網のフェンスが張り巡らされ、看板には「立ち入り禁止」の看板が掛けられていた。どこに行っても必ず金網のフェンスと看板があり、道路を挟んだ反対側には民家が並んでいたり、基地が本当に生活の間近にあるのだと感じた。沖縄国際大学の平和サークル smilife との交流した際には、基地の近くに住んでいる学生は「小学校の授業中に、戦闘機の騒音で授業と中断していた。」と話していた。私は事前学習で、基地問題の資料を読んでいた時には沖縄県民の大多数は、基地問題に対して意欲的に取り組み、辺野古基地の新設に対しても反対しているのだと思っていた。しかし、現実にも生まれた時から基地が生活の間近にあれば、基地があることが当たり前だと感じてしまうのだと実感した。しかし実際に起きている米軍機や部品の墜落事故や、騒音問題、米軍の暴行問題などが日常化して、当たり前と感じてしまうことが一番あってはならないことであると感じ、遠く離れた北海道に住んでいても、沖縄だけの問題と考えるのではなく、日本全体の問題として考えるべきだと強く感じた。

沖縄戦の資料館をいくつか見学したが、特に印象に残っているのは、ひめゆり平和祈念資料館である。資料館の第一展示室では、ひめゆり学徒隊の顔写真がずらっと並べられていた。顔写真の下の余白には、名前や学年、どんな生徒であったか、死因などが書かれていた。笑顔の写真がとても多く、彼女たちは戦争によって日常を奪われたのだと実感した。この展示を見て、二度と戦争を起こしてはいけないと改めて感じたのと同時に、社会科教師を志す身として、どうやって自分自身が学んだことを授業にし、生徒に伝えていかなければならないのかが課題であると感じた。

また、沖縄に行き、改めてニュースや新聞、本などから学ぶことも重要だと感じたが、それ以上に現地に行き、自分の目で現状を見て、現地の人と交流し現地の人の思いや考えを聞くことが、もっとも重要であると感じた。

里見友（人文学部人間科学科3年）

私は今回の沖縄プロジェクトの活動を通して、たくさんの学びを得られたと感じている。このプロジェクトに参加する前は、沖縄戦や基地問題について知識として知っている程度だったが、実際に沖縄を訪れたことにより、現地の人たちとの交流や各資料館の見学など、たくさんの貴重な経験をさせてもらい、沖縄の現状について学びを深めることができた。

これまでの活動を通して感じたこと・学んだこととして2点述べる。まず、米軍基地があることが当たり前になってはいけないと感じた。全国にある米軍関連施設の中でも、沖縄県の負担率は目に見えて多い。そして、普天間基地や嘉手納基地をはじめとして、日常的に米軍機が上空を飛んでいるという現状があった。沖縄国際大学のSmilifeと交流した際にも、「米軍機が空を飛んでいることは当たり前だと感じている」と話していた学生がいたため、今回の活動の中でも強く印象に残っている。現実として沖縄では米軍機による事故だけでなく、米兵による犯罪も多数起きている。このような危険な状況が「当たり前」になってはいけない。辺野古新基地建設問題からもわかるように、沖縄が今後も米軍基地を負担していくままでは根本的解決にはならず、沖縄の現状も変わらない。沖縄の民意を反映していくために、日本全体で考えていかなければならない課題だと強く感じた。

次に、沖縄で多くの戦争資料館を見学したことで、私の中で戦争・平和に対する意識が変わったと感じた。今まで、戦争は社会の授業で学ぶこと、ニュースで見聞きする程度の認識だったが、各資料館での見学を通して、戦争の悲惨さ、平和の大切さを改めて実感した。他人事で片づけてしまいがちな戦争の歴史を、実際に自分の目で見て体験的に学ぶことが重要だと感じた。また、沖縄プロジェクトのメンバーは私含め全員が大学で教職課程を履修しているため、最終的には今回の経験で得たことを教育に活かすことを目標としている。教科書で学んだこと、ニュースで見聞きすることだけでは表面的な理解はできて、本質的な理解までつなげることは難しいと考える。「実際に体験し、もし自分だったらと考えさせる」といったように、多角的な視点から沖縄の実態について改めて学んでいく必要があると感じた。このように、生徒が戦争の歴史を知識として学ぶだけでなく、その悲惨さや平和とは何かを自分事として捉えさせることを重視して平和教育に取り組んでいきたい。沖縄プロジェクトでの活動は、今後教師を目指すにあたって非常に有意義な経験になった。この経験を今後の取り組みに活かしていきたい。

保田優花（人文学部人間科学科3年）

今回、この学生発案プロジェクトにより、多くのことを学ぶことができました。実際に沖縄に行く前は、ここに行きたい、あれを食べたいという何気ない会話を繰り返しつつ、何を学ぶのか、テーマをどうするかを決め、事前学習を行いました。ただ、沖縄に行っていないため、リアリティがなかったのですが、沖縄に行ってみては驚きの連続でした。

今回のプロジェクトでは、沖縄戦と基地問題から考えることをテーマにしていたため、様々な関連の施設に行きました。沖縄戦の関連施設では、軍や住民、ひめゆり学徒隊の視点から学ぶことができました。特に私の印象に残っていることは、壕や戦った跡地を自分の足で歩いたことです。実際にそこを歩いてみると、現代に生きる私でさえ、歩くのが困難な場所なのに、当時生きていた人は、もっと悲惨な状況の道を歩いていたと考えると、胸が締め付けられました。今は道の補正がされていたり、ガイドさんの案内などがありますが、昔は砲弾が飛んできて、死体や負傷者が転がっていたり、血の匂いがあつたりと本当に残酷な様子だっただろうと思いながら見学していました。基地問題では、沖縄国際大学の前泊先生や Smilife の学生との交流、辺野古基地反対運動をしている場所にも行き、現地の方が基地問題についてどう思っているのかを聞くことができました。私は、基地はデメリットしかないと思っていましたが、Smilife の学生さんと交流してみて、メリットもあることを理解しました。確かにメリットはあるかもしれないが、命よりも大事なものは無いという Smilife の 1 人の学生の言葉を聞いて納得し、より一層、基地問題に対する学びを現在も深めています。

また、様々な研究会にも参加させてもらい、リアリティのある授業作りを学ぶことができました。私たちの指導案は、未熟なもので研究会を通して多くの改善点に気づかされ、各部門の先生方からアドバイスを頂くことができました。このアドバイスをもとに、高校で行う授業では、その実践へ向けて精進していきたいと思っています。

今回のプロジェクトでは、立ち上げたのは私で、最初は不安の気持ちでいっぱいでした。ただ、メンバーや山本先生には助けられ、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私の中では、やって良かったと思える良いプロジェクトになったと思います。このプロジェクトに関わっていただいた方には感謝しかありません。本当に、ありがとうございました。

石塚ありす（人文学部人間科学科3年）

「沖縄を『戦争』と『基地問題』から考えるプロジェクト」に参加して、沖縄が抱える問題に対しての考え方や意識が変わった。そして、それらを伝えることの重要性を身をもって感じる事ができた。

このプロジェクトに参加する前は、沖縄に対して「観光地」というイメージが強く、参加すれば沖縄に行けるということが楽しみでこのプロジェクトに取り組んでいた。しかし、情報収集や沖縄についての勉強をしていくうちに、沖縄は戦争でかなり悲惨な状況に置かれていたこと、米軍基地の建設問題にはその戦争が背景にあることなど、これまで詳しく知らなかった事実を知るようになって初めて、沖縄が抱える問題は「沖縄だけの問題」ではないことを理解し、現地に赴いて学ぶことの重要性も実感することができた。例えば、ひめゆり平和祈念資料館に行ったとき、沖縄戦で多くの民間人が犠牲となり、その中には現在の自分よりも年下だったひめゆり学徒隊が非常に苦痛な仕事をやらされ、最終的に自決まで追い込まれた事実は決して忘れてはいけない出来事であるし、この事実を次世代にも伝えることが悲惨な歴史を繰り返さないために必要であることを学んだ。また、基地問題について現地の人々に意見を伺い、報道だけでは感じる事の出来ない危機感や近くに住んでいるからこそ感じる不安などを直接知ることができ大変勉強になった。

このようにプロジェクトによって、実際に現地の生の声を聞いたりその場所にしかない資料を見たりすることで、沖縄に行かなければ学ぶことができなかった事実を詳しく学ぶことができた。将来社会科教員を目指す身として、今回の経験を生かした授業づくりに取り組みたい。

齋藤颯人（人文学部人間科学科 3年）

私がこれまで受けてきた授業で、第二次世界大戦について、詳しく学んだことはない。教科書の後ろの方の内容であるため、年度末に時間がない中、「こんなことがあって」という表面的な授業である。しかし、これは私に限った話ではないように感じる。まして、沖縄戦に1時間をかけるような社会科教師は何人いるだろうか。平和教育は、力を入れてやろうと意識しなければならない。たとえ、修学旅行で沖縄に行ったとしても生徒の心は、美ら海水族館や国際通りに持って行かれる。沖縄国際大学 Smilife の学生も「どんなに自分達が話しても、後の国際通りで内容は忘れてしまう」と話すように、生徒の関心はその程度である。では、沖縄に住んでいなければ、戦争や基地問題に対して身近なものとして感じられないのだろうか。私は、戦争や基地問題を通して日本の問題や私たち自身の問題を認識することが、沖縄について学ぶ意義であると、このプロジェクトを通して考えるようになった。

沖縄戦の特徴として、「捨て石作戦」がある。天皇家など日本の中枢を守るために米軍の本土上陸作戦を一日でも遅らせることこそが目的の持久戦であった。そのため、民間人が避難していた場所を軍隊が拠点としていった。そして日本の中枢の移転が完了すると解散命令が出されたことで、それまで戦争に駆り出されていた民間人が行き場を失い、兵士以上の被害者数を生んだ。すべて日本のため、軍のためという「軍国主義」を象徴している。もちろんここに住民の主権や人権はない。そして、戦争を終えてもアメリカによる統治が続き、戦後27年経っても沖縄には主権はなく、人権も保障されていない。1972年、ようやく本土復帰した沖縄には米軍基地がある。米軍基地関連の事故が起きても、米兵による事件が起きても日本が調査し、日本の法律で裁くことができない。ここに日本や沖縄の主権、住民の人権はあるのだろうか。今、沖縄本島の15%を米軍専用施設が占めている。言い換えれば、沖縄本島の15%はアメリカのものということになる。さらに追い打ちをかけるように、辺野古新基地建設が進められている。県民投票を行って民意は「反対」であることが示された。にもかかわらず基地建設は進む。これでは沖縄県民には主権がないということである。しかし、日本国憲法には「国民主権」が謳われる。沖縄も同じ日本であり、日本国憲法の下にあるはずである。しかし、現実はそうになっていない。同じ日本で起こっていることを、「私は沖縄県民じゃないから関係ない」という態度でいたら、いつ自分の街の主権が侵され、自分の権利が侵されるかわからない。自分の権利が侵された時にはもう手遅れである。

沖縄で起こっていることが、日本全体の問題であり、いつ自分の身に降りかかってくるかわからない危険さを考えていかなければならない。

学びを自ら創り出すということ

「先生トイレ行っていいですか」

何でそんなプライベートなことを私に聞くのでしょうか。

講義中だから、迷惑をかけると思って許可を得ようとしているのでしょうか。

もし、私が「だめだ」と言ったら、その学生は生理現象を我慢するのでしょうか。

用足しをしたいのであれば、黙って退出すればいいだけの話です。

実はそういう学生がたまたま一人ではないのです。

自分の行動を自分で判断することができない。

何かをしようとした行動にいちいち許可を求める。自分で決めることができない。

そんな大人になりたいのでしょうか。人に決めてもらうほうが安心だとすれば、なんという幼児性でしょう。言われたことを言われたとおりにやる。思考停止は無責任にもつながります。そのほうが楽でいいとでも。

でも、こうした行動様式が今までの学校生活でも培われているのだとしたら・・・

私はファシズム教育に手を貸したくはないのです。ヒトラーユゲントを育てたいのでもありません。自立して自分の頭で考え、自分の手で創造し、自分の責任で生きていく。他者の立場を理解し、過度に依存せず、緩やかに連帯（共生）して生きる。

私のこの考えに合致するのが『学びと成長を支援する大学』をコンセプトにする本学の「学生発案プロジェクト」だと思います。

人生において「○○があるんだけどもやってみない？」「参加しない」とのお誘いを受けた時、どういう態度をとるのか。「興味ない」「めんどくさい」でスルーすることは簡単です。世の中にはチャンスを逃す人と生かす人がいます。実はその差はものすごく大きい。偶然の出会いで人生が大きく変わったり、成長の跳躍台になることがあります。

「君たちも何かやってみない？」の私の提案に「おもしろそう」で乗ってくれた君たちは、第1の扉を開けたのです。学生発案プロジェクトなのだから、ああしろ、こうしなさいの余計なアドバイスや説明はできるだけしないように努めてきましたが、君たちは、自らの学びを自分たちで計画・実行し、第2の扉も開けました。それは誇りにしていい。

沖縄の問題は、日本全体の問題であるという気づき。沖縄で起こっていることは命と人権の問題であるということの気づき。自ら課題意識を持ち、追究したからこそつかむことができたのだと思います。『学びを自ら創り出す』。それは、教職課程に進もうとする人にとっては、最も大切な資質・能力であり、一生のことです。

大きな一歩が記されました。君たちの更なるジャンプと後輩たちの伝統になることを期待しております。

お礼

本プロジェクトを進めるにあたり、多くの方々にご協力をいただき、学びを深めることができましたことに、感謝申し上げます。沖縄国際大学の前泊博盛教授をはじめ、Smilifeの方々などから、沖縄の現状や、沖縄に住む方々の考えなど、貴重な学びをいただきました。沖縄から帰ってきた後は、学校でどのように授業を行うかということに取り組んできました。その際には、現場の先生方をはじめ、様々な研究会にも参加させていただき、多くの方から助言をいただくことができました。本当にありがとうございます。

最後に、本プロジェクト活動を支えてくださった札幌学院大学、教員サポーターとして様々な場面でご尽力いただいた山本政俊先生にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

2020年2月22日 プロジェクトメンバー一同

1年間の主な活動

2019年

- 5月24日 学生発案プロジェクト審査会
- 10月31日 沖縄研修（～11月3日）
- 11月9日 緑ヶ丘保育園の神谷武宏園長による講演会
「なんでおそらからおちてくるの？」へ参加
- 11月10日 合同教育研究全道集會に参加
* 社会科教育・平和教育分科会で報告
- 12月11日 学内報告会

2020年

- 1月6日 歴史教育者協議会（冬季集會）へ参加
- 1月14日 学生発案プロジェクト報告会
- 3月 高校で授業を行う（2校を予定）



1年間の活動は Instagram から写真で見ることができます！

https://www.instagram.com/sgu_okinawaproject/?hl=ja

